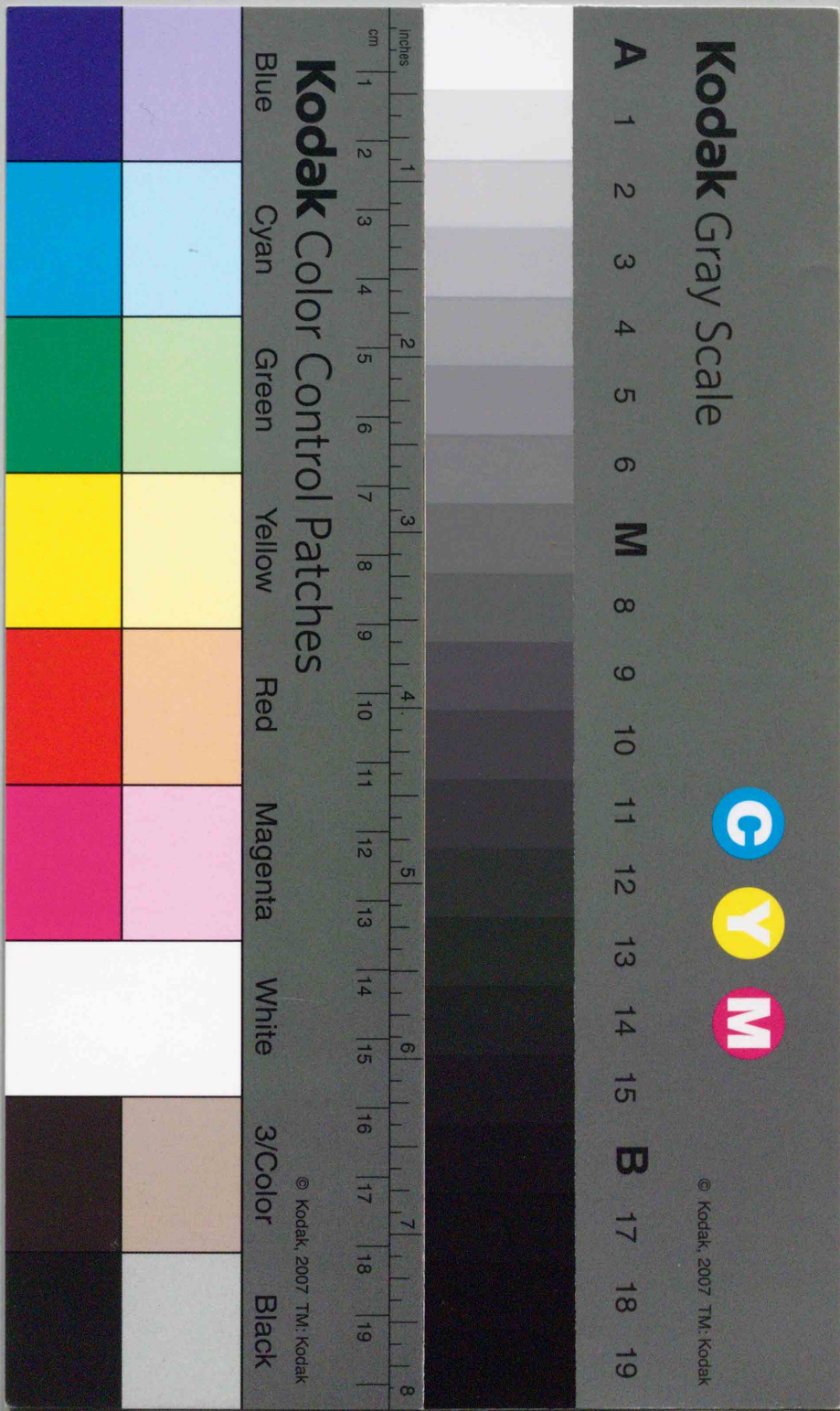
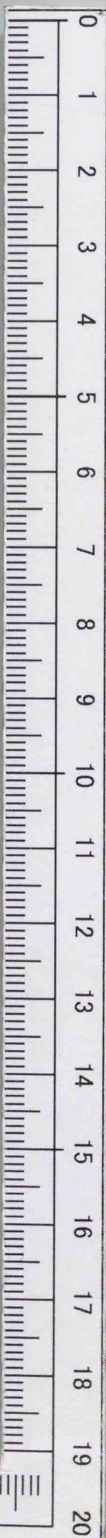


4a  
810  
昭2

編吉則波八  
**現代國語讀本**  
(修正版)  
十卷

版藏館成開京東

教科  
41-  
2000



41431  
教科書文庫

4
810
41-1927
20000 90698

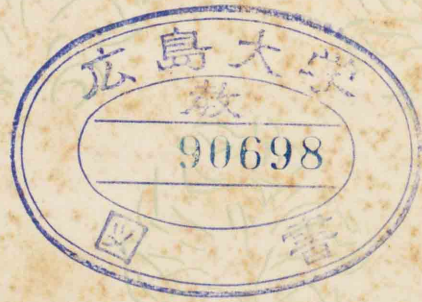




文部省檢定  
昭和二年二月十五日  
中學國語教科用

教科書文庫  
4  
810  
41-1927  
2000090698

八波則吉編  
**現代國語讀本**  
(修正版)



東京關成館藏版



資料室

4a  
810  
AB2

八波則吉編  
現代國語讀本  
修正版



# 現代國語讀本 卷十

## 目次

一	建國の大精神	永田秀次郎	一
二	建國の歌(詩)	北原白秋	二
三	魂の雲水	賀川豊彦	三
四	噫伊藤公	徳富蘇峰	三
五	天地動く(詩)	小林一郎	三
六	虚勢と反省(自修文)		三
一	虚勢		三
二	反省		三
七	光頼参内	(平治物語)	三

目次

一



八	夢應の鯉魚	上田秋成	四
九	天明調(俳句)	新井白石	五
一〇	室鳩巢に寄す(候文)	下村宏	五
一一	拓川居士(自修文)	吉田絃二郎	六
一二	生活の深化	(竹取物語)	六
一三	赫夜姫の昇天	高山樗牛	七
一四	月夜の美感	賀茂真淵	七
一五	万葉集の歌(和歌)	三木露風	七
一六	万葉の歌人	井原西鶴	一〇
一七	必讀の古典(自修文)	(伊勢物語)	一〇
一八	千貫目	古文斷片	一〇
一九	小野の深雪		
二〇	古文斷片		

陸

大島剛太郎

甲月物語

一	わかれ	(土佐日記)	一〇
二	風は	(枕草子)	一〇
三	遺言	(大鏡)	一一
四	薬師佛	(更科日記)	一一
五	出立	(十六夜日記)	一一
須磨	尾上とら子		二四
三二	一條天皇の御宇	梅澤和軒	二〇
三三	近代女流の和歌(和歌)		二五
三四	近松とシェークスピア	坪内逍遙	二六
三五	ヴェニス <small>の</small> 商人(自修文)		二五
三六	出世景清(淨瑠璃)	近松門左衛門	二五
三七	忘我	姉崎正治	二六
三八	藝術の神祕國	野口米次郎	二六



二九時

京才総長 荒木寅三郎

# 現代國語讀本 卷十

## 一 建國の大精神

永田秀次郎

吾が建國の歴史は、天孫降臨に始まるのであつて、神武天皇に始まるのではない。吾が建國の精神は、神代史に於ける神話に於て認めることが出来る。吾々は建國の精神に對して如何なる理解を持つかといふに、先づ第一に、吾が國民は平和を愛し、大義名分を重んずるといふことである。外國人は動もすれば吾が國民を目して好戰國民だといひ、或は第二の〔獨逸〕ドイツだと中傷するが、それは全く誤解である。日清日露兩戰役の如きは、吾が國が徳川時代三百年の間、全く鎖國主義を取つてゐたので、國民が長夜の夢から醒

永田秀次郎  
兵庫縣の人  
明治九年生  
貴族院議員  
東京市長





(筆淵蘆文公) 狩櫻の昔

遊び楽しむ極めて樂天的な國民性を有してゐる。一旦緩急のある場合には、燃えるやうな愛國心の發露を見るけれども、平常は最も平和を好愛する國民である。吾が國は天照大御神を天祖と仰いでゐる。この大御神はいふ

めた時には、吾が國は土地が狭く、資源が貧弱で、而も歐米の勢力が潮のやうに迫つて來てゐたため、この間に處して、獨立自尊を確保するため、眞に己むを得ず開いた戦争であつたのである。

吾が日本國民は、自然を愛し、春は櫻狩、秋は紅葉狩と稱して、

までもなく女神であらせられる。即ち平和を愛し、争を好まず、光明を徳とし給ふ神である。神話にあるやうに、素戔嗚命が亂暴をなされた時には、これと争はれないで、天の岩戸に避けられたほどに平和を愛し給ふ神である。そして、吾々の祖先である八百万の神々はこの大御神を慕ひ奉つたのである。若しも吾々の祖先が戦争を好み、武勇を主としてゐたならば、必ずや素戔嗚命を天祖と仰ぐべきはずである。所が、武勇に優れ給ふ素戔嗚命に従はないで、平和を愛する女神を天祖と仰いだのは、即ち吾が國民性が平和を愛するから



(筆淵蘆文公) 狩葉紅の昔



北畠親房  
源氏、吉野  
の忠臣、大納言、正平九年  
六月十三日歿



天の岩戸 (都路華香筆)

であるといはなければならぬ。  
また三種の神器は、八咫鏡と八坂  
瓊曲玉と叢雲の劔とであるが、その  
中でも、天照大御神がこれを天孫瓊  
杵命に下し賜はつた時、特に寶鏡  
に重きを置かせられて、「この鏡を見  
ること、なほ吾を見るが如くせよ」と  
まで仰せられた。三種の神器の意  
味は、北畠親房が説いたやうに、支那  
風にいへば智仁勇であつて、鏡を以  
て是非善悪を照らす正直の本源で  
あるとし、曲玉を以て柔和慈悲の本  
源であるとし、劔を以て決斷の本源

であるとして置かれてゐる。そして、鏡を第一位に置き、鏡は明かなこと  
を形としてゐるから、心の中が明かであれば、慈悲も決斷もその中  
に含まれるとし、これが即ち國を治める道であるとして、天孫に下  
し賜うたのである。

これに就いて、吾々はまた考へて見るに、鏡を第一位に置くこと  
には深遠な意義が含まれてゐる。若しも吾々の祖先が戦争を好  
み、武勇を主としたならば、かやうな神話は恐らく生れなかつたで  
あらう。明德を現す鏡を第一位に置いて、勇武を現す劔を第二位  
にも第三位にも置いたことは、取りも直さず吾が國民性が本來平  
和を愛することを一層證據立てるものである。

更に天孫降臨に先立つて、出雲國の大國主命が一族を率ゐて歸  
順されたことは、これまた平和を愛し、大義名分を重んずる精神の  
發露である。さうでなければ、かやうな場合に戦争せず、歸順す



ることは想像することが出来ない。かやうな事柄を通じて、吾々は吾が建國の高明な精神を窺ひ知ることが出来る。次に吾が建國の精神として、天祖の直系に屬する以外の者は凡べて平等であつて、同一の權利を有してゐたと考へられる。即ち



永田秀次郎

神話に於ては、謂はゆる八百万の神と稱して、天祖以外の者もまた凡べて神として取扱はれてゐたのである。そして、何か事のある度毎に、天の安の河原に神集ひに集ひ神謀りに謀り給うたことは、これを現代的にいへば、万機公論に決する精神である。即ち八百万の神を同一視して、その輿論を聞かれたのである。例へば、武甕槌命・經津主命を出雲國へ遣はされたのなども、八百万の神の合議

の結果である。また天照大御神が天の岩戸に籠られた時にも、八百万の神が合議して事を決したのである。この心は神武天皇以後の政治上にも現れてゐる。即ち吾々の祖先は凡べて四民平等であつた。同じく皇室を中心とし幹として、その枝となり葉となつて榮えたのであるから、凡べてが同じ血液を受けて生れたのである。勿論その司る所によつて役目は違つてゐた。例へば、中臣氏は神を祭る儀式を司り、神と人との中間に立つてゐたから、中臣といひ、物部氏は物の部即ち武器を司つてゐたから、物部といひ、大伴氏は天皇のお伴をしたから、大伴といふやうに、役目によつてその姓を異にしてゐたけれども、凡べて上下の階級は存在してゐなかつたのである。

かやうに、皇室以外のものは平等であるといふ觀念は、建國以來一貫してゐる。即ち天に二つの日はなく、土に二人の王はないと



普天之下、莫  
非王土、率土  
之濱、莫不  
王臣（詩經）

考へて、皇室を吾々の君主と仰ぎ、普天の下、率土の濱、王の民でない者はなく、王の土でない處はないといふ觀念が、三千年を通じて吾々の頭を支配してゐる。

この根本的の觀念があるために、大化の新政に於て、班田收授の法が容易に行はれたのである。即ち中大兄皇子を始め、あらゆる豪族が所有してゐた私民私田を全部皇室に献上させ、その土地を、男一人につき二段づつ、女一人につきその三分の二づつ平等に分配し、六年目毎に更にこれを一度取上げた上、新しい人口に應じて分配したのである。

また明治維新に於て、諸侯が版籍を奉還したのも、全く土地も人民も凡べて天皇の所有であるといふ觀念の發露である。即ち皇室以外の者は凡べて平等であつて、皇室に版籍を返上することになれば、何人もこれを拒むことが出来ないとの觀念を有してゐた

のである。故に吾々は神話を通じて、吾々の祖先は、万機は公論に決すべきである、また四民は平等であつて何等の階級もないといふ觀念を有してゐたことを明に認めることが出来る。

それなら、吾々はいかにして建國の大精神を現代に適用すべきであるか。神代と現代とは勿論時勢が違つてゐるから、同じ方法でこれを適用することが出来ないのはいふまでもない。併し、この平和を愛する精神、万機公論に決する精神、四民平等の精神、大義名分を重んずる精神などは、これを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らない大精神である。

この故に、吾々はこの建國の大精神に立返つて、吾々の考へ方を高尚にし、潔白にし、そして、三種の神器の鏡を第一位のものとする精神に則り、心の鏡に照らしても何等恥ぢる所のない公明正大な心持に立返らなければならぬ。



北原白秋  
名は隆吉、福  
岡縣の生、明  
治十八年生、  
詩人

二 建國の歌

北原白秋

一

そのかみ、天地開けし初  
げに萌えあがる葦芽なして、  
立たしし神こそ  
國之常立。

いざ、

いざ仰げ、立返り、

かの若々し神の業を。

二

惟ふに、日靈の大御神の、  
げに言よさし給へる御詔

知らせよ皇孫、

三つの寶と。

いざ、

いざ仰げ、立返り、

豊葦原の中つ國を。

三

神武の御代こそ荒ぶる和し、  
げに現神宮太敷きて、  
初めて築かせし  
國の礎。

いざ、

いざ仰げ、立返り、



神ながらなる崇き道を。

四

爾にぞ、明治の大き帝、

げに晴れわたる青高空と、

更にし照らさす

四方に八隅に。

いざ、

いざ仰げ、立返り、

わが彌榮の日の出る國を。

五

依り合ふ天地極み知らず、

げに天皇の御稜威盡きず。

誇れよ、國民、

われら榮あり。

いざ、

いざ仰げ、立返り、

たゞひとむきの日本魂を。

三 魂の雲水

賀川 豊彦

身を雲と水に任せた以上、何のこの世に執着があらう。——眼が潰れようが、腎臓炎が悪くならうが。——

米國で病んだら、放浪者のやうに線路を枕に倒れよう。英國で病んだら、テムス河畔の保護院にでも拾ひ上げて貰はう。病む日には病まう。惠によつて世界の一週が出来たら、それは自分の力ではなくて、全く大能者の庇護によるのだ。

賀川豊彦  
神戸市の人、  
明治二十一年  
生



留守も心配になる。毎月多額の費用のかゝる仕事を、東京にも神戸にも持つてゐるが、それがどうして支持されよう。併し、これもまた恵の手に委ねよう。

家を案じてゐては旅は出来ぬ。旅に出たら、なるべく多く勉強させて貰ふ氣でなくてはならぬ。

地球を包む雲と水に自分の小軀を任せた以上、雲の立つ日に自分も立ち、雨の降る日に自分も降つて、晴れに、曇りに、自然の姿に歸つて行かう。かう思うて家を出ると、旅は存外暢氣なものだ。別に旅費があるではなし、先方からの招待で行くのだから、最少限度の費用で最大無限の利益を納めて来よう。

一切は他人のもので、一切は自分のものだ。一切は人の道で、一切は自分の道だ。地球の道は自分の道で、自分の道は地球の道だ。地球は自分を傳ひ且沿うて成長する、天地は渾然として自分の胸

底に溶けこみ、雲も霧も胸底の一變化として移つて行く。

天地の寂寞は私の寂寞で、天地の歡樂は私の歡樂だ。山が地球の巖なら、それはまた私の魂の巖でもある。

夕靄にハドソン河畔に蹲る日は、私の魂も夕靄に蹲るのだ。ア

〔阿爾伯  
Hudson  
Alps〕の峻峯に驚歎の聲を發する日は、私の魂も高峯を知るのだ。

地球を廻れば魂が廻り、地球が狭くなれば、それを魂の奥に突込まう。地球の表面を歩むことは、魂の底に地殻を極印することだ。つまり雲水として出



(ウラフゲンユ) ス プ ル ア



ナザレの大工  
キリストを指す、ナザレの村、キリストの幼時の居住地

發する自分は、地球を仁丹のやうに呑み干すのだ。  
地球を呑み干すものは地球の苦惱をも知る。幾千万年來地殻を襲うた血の暴風も、幾千万年來打續く屍の雪崩も、彼はよくこれを知つてゐる。自分の魂は、ドイツの憫みと、<sup>〔佛蘭西〕</sup>フランスの勝利と、英國の貪りと、米國の浮調子と、日本の煩悶とを、あまりに強く味うてゐる。

魂はナザレの大工が背負うた世界の罪をその血壓の中に感じる。血の暴風<sup>Nazareth</sup>が今でも彼の脈搏を傳つて走る。彼は絶望し、煩悶し、克己し、節制する。魂の肉の中には、地球の凡べての黒血が鬱結してゐる。彼の憂鬱はこの黒血の鬱結から來てゐる。彼は贖罪者のやうに、原人の原罪までが、彼の血脈の中に鬱結してゐることを感じる。彼は凡べての人々の凡べての罪惡と凡べての弱點を自らの中に意識する。米國人の短所は彼の短所である。英國人

の弱點は彼の弱點である。彼は人を批判する前に自らを批判せねばならぬ。人を贖ふ前に自らを贖はねばならぬ。そして、自らを贖ひ得た日に、人をも贖ひ得ることを感じる。世界大戦の悲哀は彼の悲哀であり、その贖罪は彼の責任に屬する。自分は人を責めることが出來ぬ。自分が奮發せねば、結局それだけ世界は善くならぬのだ。米國人の血と自分の血はアダム<sup>Adam</sup>の血によつて繋がつてゐる。米國人の非人道主義を恥ぢる前に、私の血を恥ぢねばならぬ。自らの血に就いて自覺するものは、その修正に勇敢であらねばならぬ。自分は自分の魂に向つて嚴格であらねばならぬ。雲水は出發する、凡べてを神に委ねて。彼は順禮者のやうに經





エルサレム  
パレスチナの  
首府、キリス  
トの墳墓のあ  
るところ

札を胸に掛け、脚絆を穿いて出發する。彼は永遠の旅人、新しいエルサレムへの旅行者である。  
Jerusalem  
世界は彼の新しい四國八十八個所である。彼は地球のために良心を求めようとして出發する。米國のためにも辻説法することを厭はぬだらうし、英國のためにもその帝國主義を罵らう。世界の有色人種の運命はどうなるだらうか。世界の資本主義制度はどう轉換するだらうか。國際聯盟と世界國家の夢とはどうなるだらうか。共産主義の運命はどうなるだらうか。機械文明と精神運動の交錯はどんな結末を來すだらうか。——  
新しい時代には新しい順禮がある。そして、自分は全く空しい心を持つて、世界遍路に出發する。自分は思想乞食である。自分の魂のために、聖地を尋ねて廻る。必ずしも地上に天國を見出さないでも、地球の運命に就いて瞑想したい。

さらば、日本よ、お前は世界の思潮に何處まで押流されて行くか。お前の落着く先は何處か。  
自分は日本を知るために日本の外に出る。自らの瞳を見るものは、更に新しい瞳を準備せねばならぬ。自分は日本の瞳を見るために、もう一つの瞳を探して來よう。



テンダ

界を贖はねばならぬ。そのために、ヨーロッパとアジアとアメリカの悩みを更に深く知らねばならぬ。  
自分は世界の罪を負ふ小羊のやうに出發する。自分は野に放

〔歐羅巴〕 Europe  
〔亞細亞〕 Asia  
〔亞米利加〕 America



ダンテ  
イタリーの詩  
人(1265-1321)

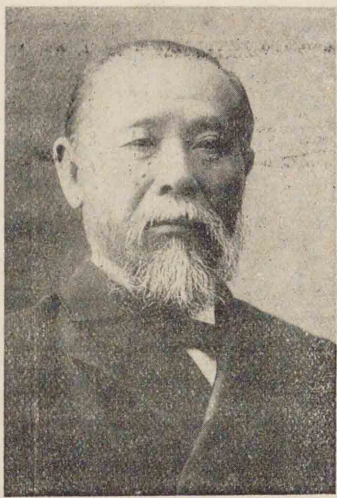
たれた山羊だ。何人も迎へてくれず何人も容れてくれなくても、  
黙々として祈と瞑想の中に邑から邑へ彷徨しよう、ダンテ、アリゲ  
リのそれにも似て。  
Dante Alighieri

永遠の彷徨者——地上と天上の中間に引懸つて、雲のそのや  
うに、水蒸氣のそのやうに、昇る時に昇り、烟る時に烟る。永遠の  
順禮——永遠の旅路への脱皮として、自分はまた太平洋の波の上  
に宿を借らう。地球を墳墓と考へれば、自分の墓場は小さくない。  
さらば！ 永遠の順禮よ、お前の旅路を急ぐがい。——靴の二  
つも持つな。上着の二枚も持つな。邑へ入つたら、その善い人を  
尋ねて、その人の家に入り、その邑を出るまで、その處に止まれよ。—  
— 錢または杖をも持つな。雲水だ！ 雲水だ！ 新しい時代のガ  
リラヤ人だ！ 魂ばかりの雲水だ！ (雲水通路)  
Galilea

徳富蘇峰  
名は猪一郎、  
熊本縣の人、  
文久三年生、  
貴族院議員、  
國民新聞社長

#### 四 噫伊藤公

徳富蘇峰



我が功名赫々たる伊藤公は、明治四十二年十一月四日國葬式終  
結以後、全く歴史的人物となるべきなり。故に現在の經世家とし  
て吾人が敬意を表するは、唯この時を然りとなすなり。吾人豈に  
一言なくして已むを得んや。

伊 然りと雖も、天下の伊藤公を頌  
藤 するもの既に至れり盡せり。吾  
人は一切の字書より最も剴切の  
文 感觸を與ふべき文字を援き來ら  
んとするも、却つてその蛇足たる  
を虞れざるを得ず。何となれば、伊藤公の勲業・功德について、言ふ  
べきことまた言はんと欲することは、殆ど言盡して餘蘊なければ  
なり。



吾人が平生伊藤公の特質として敬服する主なる一は、その國體の大本を根據として、日新の趨勢に順應せんとしたるにあり。公は實に皇室中心主義の信者にして、またこの主義が克く憲政の精神と併立し得らるゝことを信じたる一人なりき。されば保守黨より見れば聊か危険なる急進分子を交へたるの觀ありしも、急進黨より見れば却つて幾分の保守的分子を剩したるの嫌あるを免れず。即ちこの中間が公の頂天立地占領したる乾坤たりしなり。

古寺留遺跡、千載吊忠魂、被衽豈公志、眷戀望天關、仰見後凋節、凜々與松存

題 藤公手栽、伊藤博文

伊藤博文 博文筆蹟

古寺留遺跡、千載吊忠魂、被衽豈公志、眷戀望天關、仰見後凋節、凜々與松存、題藤公手栽、伊藤博文

而してこれ生前に多少の反對者ありしに拘らず、死後に於て殆ど凡べての人より哀悼軫惜せらるゝ、所以ならずんばあらず。これと同時に、吾人が最も敬服するの一は、その眼界の大局に互りたるにありき。概言すれば、世人が長といひ薩といひ、藩閥といひ非藩閥といふ場合には、その心恆に國家の上に繋り、世人が漸く國家の大局に着眼する場合には、その眼孔は更に國際政局の上にあるにありき。これ公が單に日本に於ける第一流の政治家たるのみならず、また世界的政治家たるを得たる所以ならずんばあらず。更に吾人をして欽仰せしむる一は、その所謂國家道樂これなり。公や朝に立つも君國のためにし、野に在るも君國のためにする。その官職・地位の如きは、必ずしも公の拘泥する所にあらず。その心はたゞ如何にしてその先輩等とともに創始したる維新の大業をして、その

徳富蘇峰

徳富蘇峰自署



圓滿なる完結を告げしむべきかに存したりき。極言すれば、公は國家あるを知りて身あるを知らざりしなり。これ維新志士に於ては孰れも皆是なりと雖も、その半世紀以後、富貴・榮華を享受したる時代にまでその精神を持續して毫も渝る所なかりしに至りては、誰かまた公の上に出づるものはあらんや。吾人は公の半面に於て實に維新志士の典型を見たり孝しなり。

九 たゞ公が福運の人たりしことは事實之を證して餘りあり。その卑賤より起りて、何等の蹉跌なく人臣の極位に達したるが如きは言ふに及ばず、その失敗さへも時としては幸福を齎し來りたること一再ならず。即ちその最後の如きは、最上の不幸、最大の慘禍、



木戸  
名は孝九

西郷  
名は隆盛

大久保  
名は利通

最深の悲哀なるに拘らず、若し傍觀者としてこれを見んか、孰れか敢て此の如き幸福なる死所を得たるものぞ。人生皆死あり、たゞ死所を得るを難しとなす。公の先輩木戸公は如何。彼は四十代の働き盛りにして、西南戦争中京都に客死したり。公病中嚙語して曰く、西郷もう大抵にして止めんか。と。公の苦衷豈に憐むべきにあらずや。大久保公は如何。西南の亂漸く平ぎ、今後十年を期して内政を整頓せんとするの最初に、兇刃のために斃れたり。固より伊藤公の



大久保利通

如き後繼者ありしを以て、思ひ残す所少かりしならんと推するを得べきも、その志業の中途にして逝きたるは、長く英雄をして涙襟に満たしむるものなくんばあらず。



我が伊藤公や然らず。その國家に貢獻する所に於て、今や殆ど一代の總勘定を了りたりき。韓國統監は公の最後の任務なりしも、それすら既に段落を告げたり。固より一日の生存は一日の奉公たり、一日の奉公は一日の國益たれば、何人も公の長壽を祈る外なしと雖も、而も若し世にその死所を得たる人ありとせば、公の如きはその第一たるを争ふべからず。世界圖視の眞中に於て、日露清交叉の地點に於て、平和と好意の使命を齎したる途上に於て、而して生涯の筋書は殆ど凡べて演じ盡したる後に於て、突然その幕の落つるに際す。若し公の生や赫々たらば、その死や更に赫々たりと謂はざるを得ず。吾人は公の最後にすらも福神の附纏うたるを見て、公の福運の轉た隆なるを驚歎せずんばあらざるなり。

以上は、唯今日に於て、吾人が最後の敬意を表するため、清白なる良心を以て、この際に言ひ得べしと信じたる要點なり。これ以

上の言は、いかに敬意を表すればとて、或は諛辭に近からん。而してこれ以外の言は、歴史家として寧ろ吾人の情熱の平調に復したる後を俟つて、徐ろに參究するも未だ晚しとせざるべし。(蘇峰文選)

五 天地動く

小林 一郎

精氣鐘りて力となり

心霊發して聲となる

心霊は遠く天に翔り

精氣は深く地に透る

鐘つて力となれば

その力やがて外に溢る

發して聲となれば

その聲は偉なる力えつ

言へば人必ず聴く

聴けば人必ず動く

天の神もまた聴くか

雲靡き風動く

地の霊もまた聴くか

海とよみ山響く

この時吾と人と一なり

吾と天地とまた一なり



能く劍を揮ふ者は 劍もなくまた人もなく  
 動くはたゞ心の靈のみ 能く馬を御する者は  
 馬もなくまた吾もなく 馳するはたゞ精氣のみ  
 人を動かすは聲にあらざ 世を動かすは言にあらざ  
 聲の外に眞の聲あり 源を吾が心に發す  
 言の底に眞の言あり 根を吾が誠より存す  
 心は相照らし誠は相應す 世も動き人も動き  
 天も地もまた動く 偉なるかな貴きかな

自修文

六 虚勢と反省

一 虚勢

A「お前は大分強さうだな。少くともお前の言葉だけでは他の誰

よりも強さうだ。否、そればかりでなく、お前が遂に今日まで皆

出席で頑張り續けたのも、お前の意志の強いことを語つて居る。

B「強さうに見えるか。だがね、俺はお前にだけは本當の俺を知ら

して置くが、本當の俺は他の誰よりも弱い人間なんだ。

A「そんなことはないだらう。お前が曾て二十人ばかりを相手に

男性特有の腕力を振つた時、其の動機に於ても、結果に於ても、お

前の強いことを表明したぜ。

B「ふ、ん、誤解して居るな。俺が今日まで殆ど三個年間皆出席で

頑張つたのは、<sup>Note</sup>ノートの<sup>Blank</sup>ブランク埋めといふ奴がひどく苦痛で

ありさうに感じられたからだ。俺は事實よりも豫感により多

く悩まされるほど、繊細鋭敏な神経の持主なんだ。それほど弱

い人間なんだ。俺はいつも缺席して平氣で居られるやうな人

達を羨しく思ふよ。結局俺は生むよりも案じる方により劇し



い苦痛を感じる人間なんだ。

A「さうかな。あの時の腕力事件はどうだ。」

B「うん、あれか……元來俺は弱いんだ。俺は其の弱さを恥ぢないほどに強くもなり得ないのだ。俺は弱い。だから、弱いことを人に知られるのを恥かしく思ふ。それで、俺は外面的にでも強くあらうと欲して、言はばまゝ虚勢を張つて居る譯だね。俺は何かの本に、内に骨なき蟹が如何に外を嚴めしく装へるかを見よ。」とあつたのを見たが、丁度俺が其の蟹なんだ。外を嚴めしく装ふために人と衝突もして見た。だが、それは赤裸々な俺自身ではない。……外面だけを見たお前が強いといふのも無理はない。そこで、人々が俺を強いと思ひ込んで居る矢先、俺は腕力で制裁されようとした。此處でも俺は虚勢を張つた。強いと思はれてゐた俺が一朝にして弱いと思はれるのが苦痛だつたか

らだ。其の苦痛を堪へ忍ぶ人が本當に強いんだ。だが、俺は苦痛に負けて、遂に感情の奴隸となつた。女のやうに柔順なKの方がどれほど俺より強いかわからない。

A「さういへば凡べての人は弱いことになる。昔の武士だつて、食はねば腹の減ることは同じさ。でも、瘦我慢でもし得る所に強さがあると思ふね。斬られることは苦痛さ。でも、卑怯者だと思はれまいとして戦もしたらうよ。君の場合と全く同じだぜ。」

B「皆がさうなのかね？」

A「無論さ。俺にだつてお前の心はよく分るよ。なぜなら、俺とお前とは全く同じ心理なんだから。だが、俺は苦痛に負けるよりも安逸に負ける方だ。差引勘定安逸が多い時に俺はそれに服従するし、お前は苦痛の前に身を伏せる。お前は強い！」

B「本當か？ 心強くなつた！（田代生）」



## 二 反省

人は常に強く弱く己を反省して居る。

私は自分自身にどんな長所がありまたどんな短所があるかよく知らないが、私の小さい時から私を苦しめて居る一つの短所だけは判然と知つて居る。それは心が激すると、言はないでもよいことを口走ることである。私はよくそれを知つてゐながら、感情が高ぶつて來ると、つい口走つてしまふ。はつと思つた時はもう遅い。私は其の悪い癖の爲に身動きも出来ないほどに縛られて居る。そして、心が短所を戒めようと焦れば焦るほど、其の意地の悪い言葉は恰も心の悶えを罵るやうに、次から次へと口を衝いて出る。それは丁度夢を見て居る最中、夢だ〜と思ひながら、谷底に落ちて行く自分をどうしても目醒すことが出来ないやうなものだ。

急に氣が付いて、ふと後悔の念が起つた時は、もう相手の人の自尊心を傷ついたり、或は怒らしたりして居る。そして、私は、又俺の短所が出しやばつた。」と云ふ苦しい後悔の念で心を一杯にされると共に、其の人の前に平氣では居られないほど、自分自身を恨めしく思ふのが常だ。而も私は此の悪い自分の短所を知つて、絶えず戒めて居るのであるが、動もすれば、此の短所は心の隙を覗つて、自製の膜を突破つて出て來る。私は此の短所を悪いと自ら反省すればするほど、人から注意されたり忠告されたりするのが嫌である。人は誰でも忠告されるのは嫌だらうが、特に私は自分の此の短所を攻撃されると、何だか自分が侮辱でもされたやうに怒りつほい氣持になる。それは、私が其の短所を明るみへ出すまいかと努力して居るのに、他人が急にそれを遠慮もなく撮み出すからだ。言換へれば、弱點に對する私の恐怖と羞恥から來る心の呻吟



なのだ。

而も私は此の怒さへ悪いと知りながら、思はず強い反對の言葉を弄して、無理に短所を庇護しようと努力する。そして、さうすることが、どんなに相手の人を傷つけ、自分も後で苦しむかといふことを意識しながら、思はず、ずる／＼と悪い方に引入れられて行く自分の態度を悲しく思つて居るが、感情が激して來ると、理性が急に消去つて、感情だけが言葉を左右し始める。

此の癖の爲に、私はどんなに今まで苦しんで來たらう。父母を悲しませたこともあつた、兄と喧嘩したこともあつた、又女中を泣かせたことも一度や二度でなかつた。私は其の度毎に後悔して苦しんだ。そして、私が日頃の冷靜な氣持に返つた時、どんなに淋しかつたか、又どんなに自分の短所が恨めしかつたか。私は泣くに泣かれない自責の苦みを抱きながら、獨りつくねんと机の前に

坐つてゐたことが度々あつた。

其の最も生々しい記憶は、今年の春休、父の友人を傷つけたことだ。其の人は仲買人である。或晩、その仲買人が遊びに來てゐた。其の晩は、滅多に揃つたことのない一家の者が珍しくも揃つてゐた。最初は罪もない世間話に花が咲いてゐたが、不圖したことから、或時事問題が論じ始められた。其の可否に就いて、一家は二派に分れて議論した。年の若い私と兄は肯定論者で、父母は頭から否定してかゝつた。來客の仲買人は若い人であつたが、世馴れた人になりがちな、當らず觸らずの説を吐きながら、矢張否定派だつた。話はだん／＼激して來た。形勢は我々に不利に傾いた。私は思はず激昂して來た。併し、激昂すれば激昂するほど、父の友人の爲に私の議論は脆く切崩された。そして、私は一所懸命に陣地を回復しようとした結果、遂に私は仲買人その者を罵倒し始め、仲



買人なんて此の社會には無用の長物だ。」と口走つた。其の瞬間、私はどんなに自分の不用意な言葉に驚いたらう。私は段々大きく膨らして行つた風船玉が急にはちんと破裂したやうな氣がした。併し、もう遅かつた。私は又到頭悪い癖を出して了つたのだつた。父母は口を極めて私を罵つた。今まで同じ立場を死守してゐた兄さへ私を攻撃した。客人は笑ひながら話してゐたが、其の笑の蔭には、明に不快な色が浮んでゐた。急に座は白けた。もう凡べてがおしまひだ。誰も議論しようとする者はない。

私は一所懸命に苦しんだ。併し、其の人に對して詫を言ふことは出来なかつた。私のやくざな自尊心は、必死となつて私の短所を庇護しようと努力した。そして、私は日頃の冷靜さに返つてゐながら、どうしても折れることが出来なかつた。其の人は到頭そのまゝ歸つて了つた。

其の晩、私は床の中で、どんなに自分の短所を責めたか知れない、どんなに私の悪口を悲しく思つたか知れない。

私は此の短所の爲に絶えず苦しんで居る。併し、どうしても矯めることが出来ない。そして、此の短所に私のやくざな自尊心が手傳つて、一層強情に私を苦しめる。而も未だに私はどうしても此の悪い癖を除き得ないで居る。(山田生)

七 光頼参内

内裏には十二月十九日公卿僉議とて催されたり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは、信頼卿の振舞過分なり。とて、不参におはしましけるが、参内して承らん。とて、ことにあざやかに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束に出で立たせ、自然のこともあらば人手

十二月 平治元年(一一六二)  
勸修寺光頼  
藤原氏、桂大納言といふ、この時、承安三年(一一七三)歿、年五十五  
信頼 藤原氏、光頼の甥、この時、年二十七



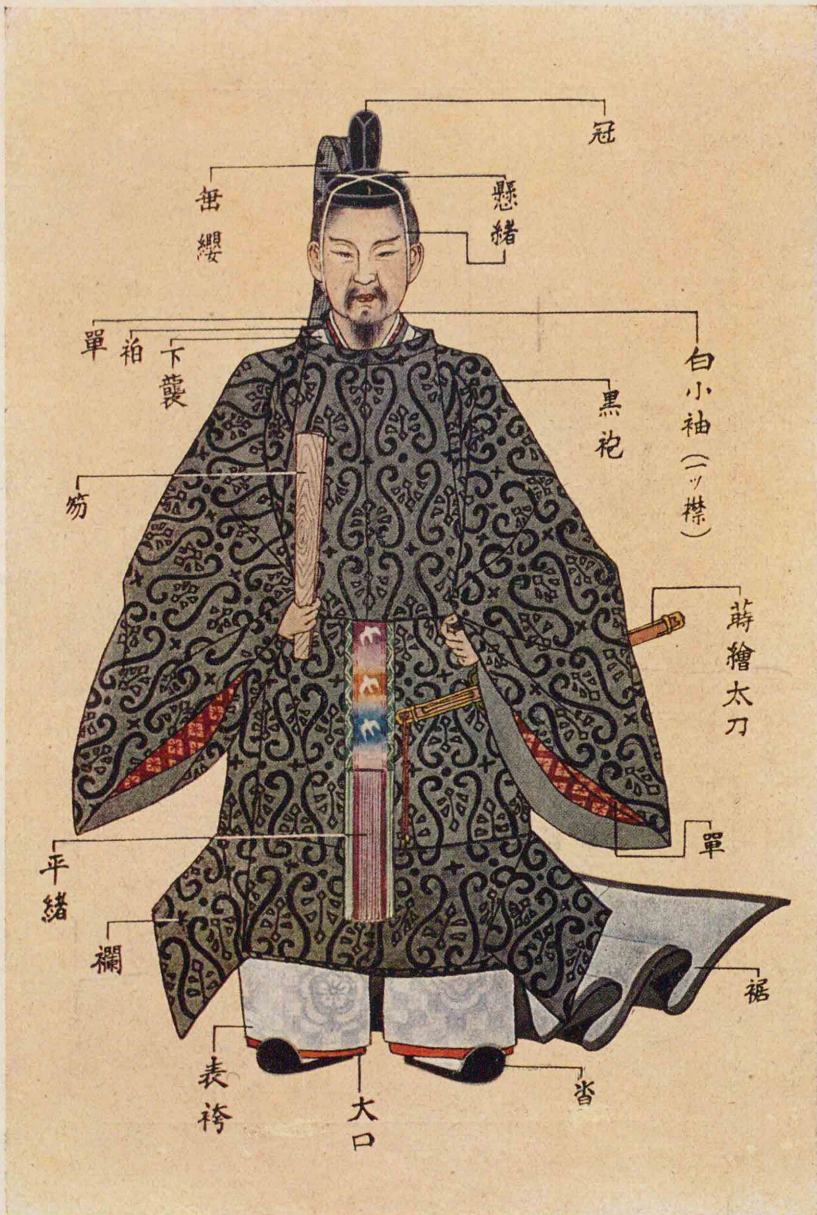
正南  
子

長方  
藤原氏、この  
時年二十



に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。とて御身近く置  
 き、その外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々を固  
 め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵ど  
 もも大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。  
 紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その  
 座の上藤達みな下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議のことか  
 な。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督われは左衛門督なれ

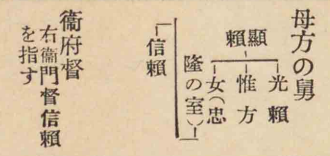
内参の頼光  
 ば下には着くまじき  
 ものをと思はれけれ  
 ば、左大辨宰相長方卿  
 末座の宰相にておは  
 しましけるに、今日の  
 御座席こそあまりに





束帯は正服の稱で、上古の謂はゆる朝服である。束帯とは石帯で束ねる義で、その字面は論語の公冶長篇に「束帶立於朝」とあるのによつたのだといふ。王公措紳は参朝の時を始め公事・大饗など晴の儀式には必ずこの服装をすることになつてゐた。

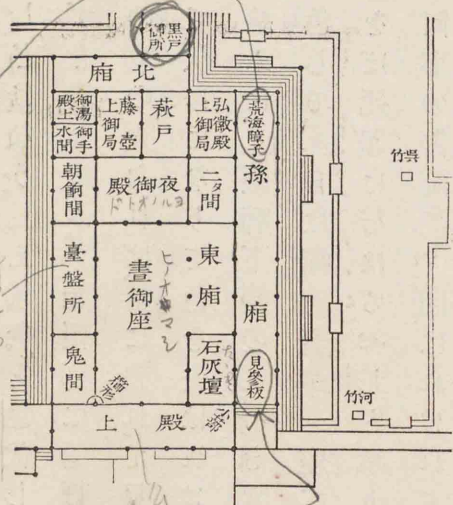
束帯の次第は、まづ赤大口の袴、次に表袴を穿つ。(足を入れて、まだ紐を結ばぬ)次に單に袴を束ねて着る。(後袴の紐を結ぶ)次に下襲(帯で腰を結ぶ)次に半臂(忘緒で結ぶ)次に袍を着、石帯を纏ふ。(魚袋を懸ける)次に劍を佩く。(平緒を用ひる)以上取重ねて着用し、冠を被り、襪を穿き、沓を穿き、笏を把る。



しどけなう見え候へ」と色代して、しづくと歩み、信頼卿の上にもむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に恐れて見えられけり。右の袖に居懸けられ、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引きなほし、衣紋つくるひ、笏取りなほし、氣色して、今日は衛府督が一座すと見えて候。召に参ぜざらんものをば死罪に行はるべしと承りて参内するところなり。そもく何事の御説ぞ」と問はれけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程経て、つい立ちて、悪しう参つて候ひけり」とて、しづくと歩み出でられけり。庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出した



頼光 源満仲の長子、大江の山賊退治有名な人  
頼信 頼光の弟、平忠常の亂を平げた人



ることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしくらん。」と申せば、傍なるもの、むかし、頼光・頼信とて源氏の名將おはし、まじき。その頼光を打返して光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より、なぞ、その頼信を打返して信頼と付き給ふ右衛門督殿は、あれほどの臆病におはします。」といへば、壁に耳、天に口といふことあり、おそろし、おそろし、聞かじ。」といひながら、皆忍び笑に笑ひけり。

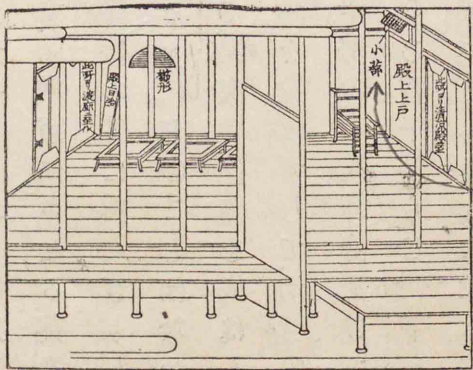
光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板たからかに踏みならし

光頼の西のわがやまよ。

惟方 藤原氏、檢非違使別當、の時年三十五

少納言入道 藤原通憲即ち入道信西 神樂が岡 京都の東北郊外

て立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定めたることもなし。まことやらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承るごときは、その人みな當時の有職しかるべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さて、先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢のために、神樂が岡へ向はれしことは如何。以ての外しかるべからざる舉動かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首





勸修寺内大  
藤原高藤  
三條右大臣  
高藤の子定方  
英雄  
英雄家の略、  
公卿の家格と  
も稱し、攝家  
の次  
熊野參詣  
この時清盛は  
重盛とともに  
熊野參詣の途  
中にあつた  
切目の宿  
切目は紀伊國  
日高郡にある  
日村の王子とい  
ふ社があるとい  
ふ盛は十二月  
四日日出立し  
四日日出立し  
日切目に宿し  
報て六波羅に  
接した急

實檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當それは天氣にて候ひしかば、  
とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて、「こはいかに勅詔なればとて、いかで存ずる旨を一  
議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣・延喜の  
聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代。承り行ふこ  
とは皆これ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄  
にはあられども偏に有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せざりし  
故に、昔より今に至るまで、人にさしどころもどかる、ほどのことはな  
りしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はん  
こと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の  
宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊の國、伊賀伊勢の家人等待受けて、  
大勢にてぞあんなる。信頼卿が語らふところ若干ならじ。平家  
の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。もしまた灰な  
るは、

主上  
二條天皇  
上皇  
後白河上皇

どを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地と  
なりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや君臣と  
もに自然のこともあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべ  
し。右衛門督は御邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ。相構へ  
て相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべ  
し。さて主上はいづくにおはしますぞ。「黒戸の御所に。」「上皇は、  
一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劔璽はいづくに。」「夜のお  
とぶに。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられけ  
る。「また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」  
と宣へば、それには右衛門督住み給へば、その方さまの女房などぞ  
影るひ候らん」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今  
かくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君を  
ば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども流石に日月は未

七 光頼參内

四



中世重説  
阿王の道  
園

許由 支那の堯帝の時、天下を讓らうとしたのを、堯が謝して、俗事を聞かぬと、耳を濁すに洗つた。

上田秋成 大坂の人、江戸時代の後期、文學者、文化七、七十八年。

だ地に墮ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は法をいかに守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とてのろのろしげに憚るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんとすさまじげに立ちにけり。光頼卿且は悲しくて、我いかなる宿業によりてかゝる世に生れ會ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。(平治物語)

八 夢應の鯉魚

上田 秋成

むかし、延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なる

延長 醍醐天皇の年(天曆十一年) 三井寺 本名は園城寺、近江國にある天台宗の門派の總本山



上田 秋成 木像

をもて名を世にゆるされけり。常に畫くところ、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務の間ある日は、湖に小船を浮べて、網引き、釣する泉に、錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、その魚の遊ぶを見ては、畫きけるほどに、年を経て細妙に至りけり。或時は繪に心を凝らして眠をさそへば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と俱に遊ぶ。覺むればやがて見つるまゝを畫きて壁に貼し、自ら呼びて夢應の鯉魚と名づけけり。その繪の妙なるをめでて乞求むるもの前後を争へば、たゞ花鳥山水は乞はるゝに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜しみて、人毎に戯れていふ、生を殺し、鮮けきを喰らふ凡俗の人に、法師の養ふ魚を與へず。と。その繪と俳諧



とともに天下に聞えけり。

ひととせ病に罹りて、七日を経て忽ちに眼を閉ぢ息絶えて空しくなりぬ。徒弟友どち集りて歎き惜しみけるが、たゞ心頭のあたりの少し暖かなるにぞ、若しやとゐめぐりて守りつゝ三日を経にけるに、手足少し動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて眼を開き、醒めたるが如くに起きあがりて、人々に向ひ、われ人事を忘れて既に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息絶えたまひぬ。寺中の人々を始め、日頃陸じく語りたまふ殿原も詣でたまひて、葬のことをも計りたまひぬれど、たゞ師が心頭の暖かなるを見て、柩にも藏めで、かく守りはべりしに、今や蘇生りたまふにつけて、『かしこくも物せざりしよ。』と悦びあへり。興義うなづきていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助殿の館に詣でて申さんは、法師こそ不思議に生きはべれ。君今酒を酌み、鮮けき繪を作らしめたま

ふ。暫く宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物語聞えまらせん。』とて、かの人々のあるさまを見よ。我が詞につゆ違はじ。』といふ。使怪しみながら、かの館に往きてそのよしをいひいれて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎家の子掃守などゐめぐりて酒を酌みゐたり。師が詞のたがはぬを奇とす。かの館の人々このことを聞きて大いに怪しみ、まづ箸を止めて、十郎掃守をも召具して寺に到る。

興義枕をあげて路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。興義まづ問ひていふ、君試に我がいふことを聞かせたまへ。かの漁父文四に魚を誂へたまふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにして知らせたまふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大いなるを昭



ひつゝ、奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高环に盛りたる桃を與へ、また盃を賜うて三献飲ましめたまふ。鱧手したり顔に魚を取りいでて鱧にせしまで、法師がいふところたがはでぞあるらめ。といふに、助の人々このことを聞きて、或は怪しみ、或は心地惑ひて、かく詳かなる言のよしを頻りに尋ぬるに、興義語りていふ、われこの頃病に苦しみて堪へがたき餘り、その死したるをも知らず、熱き心地少し冷さんものと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井に還る心地す。山となく里となく行きく、て、また江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱捨て、身を跳らして深きに飛入りつ。遠近を遊ぎ巡るに、幼きより水に馴れたるにもあらぬが、思ふに任せて戯れけり。今思へば愚かなる夢心地なりし。されども、人の水に浮ぶは、魚の快きには若かず。こゝ

家積千金無主人  
 人喫茶大碗説  
 知眞々茶眞水  
 共清味貧必非  
 清々自貧  
 あかてのみ春の木の  
 めをつみて煮てこゝ  
 るは秋の水とこそす  
 め

上 田 秋 成 筆 蹟

秋成書

にてまた魚の遊を羨む心起りぬ。傍に一つの大魚ありていふ、師の願ふこといと易し。待たせたまへ。とて、沓の底に去ると見しに、しばしして、冠装束したる人の、前の大魚に跨りて許多の鰲

魚を牽ゐて浮び來り、我に向ひていふ、『海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今、江に入りて魚の遊を願ふ。故に金鯉が服を授けて、水府の樂みをせさせたまふ。たゞ餌の芳ばしきに味まさされて、釣の糸にかゝりて身を亡ふことなかれ。』といひて、去りて見え



ずなりぬ。不思議のあまりに己が身をかへりみれば、いつの間に鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。怪しとも思はで尾を振り鰭を動かして、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山嵐立ちあがる浪に身を乗せて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳の裾ぬらす行きかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、隠れ堅田の漁火によるぞうつなき。ぬば玉の夜中の濁に宿る月は、鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなくしておもしろ。沖津島山竹生島波にうつろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕出づれば、葦間の夢を覺まされ、矢橋の渡りする人の水馴棹を遁れては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日暖かなれば浮び、風荒き時は千尋の底に遊ぶ。俄に飢ゑて物ほしげなるに、遠近に養り得ずして狂ひ行くほどに、忽ち文四が釣を垂るゝに逢ふ。その餌甚だ芳ばし。心また河伯の戒を守りて思ふ、

『我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞも淺ましく魚の餌を飲むべき。』とてそこを去る。暫時ありて飢ますく、甚しければ、重ねて思ふに、『今は堪へがたし。たとひこの餌を飲むとも、嗚呼に捕られんやは。もとより彼は相識るものなれば、何の憚かあらん。』とて、遂に餌を飲む。文四早く糸を収めて我を捕ふ。『こはいかにするぞ。』と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮を貫きぬ。葦間に船をつなぎ、我を籠に押入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に圍碁して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大いにめでさせたまふ。我その時人々に向ひ聲を張上げて、『かたぐらは興義を忘れたまふか。宥させたまへ。寺に返させたまへ。』と連りに叫びぬれど、人々知らぬさまにもてなして、たゞ手を拍つて喜びたまふ。鱸手なるものまづ我が兩眼を左手の指にて強く捕



へ、右手に磨ぎすませし刀を執りて俎に上せ、既に切るべかりし時、我苦しきのあまりに大聲をあげて、『佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ。』と哭きさけびぬれど、聞入れず。終に切らるゝと覺えて夢醒めたり。と語る。

人々おほいに感であやしみ、師が物語につきて思ふに、そのたびごとに魚の口の動くを見つれど、更に聲を出すことなかりき。かかること眼のあたりに見しこそいと不思議なれ。とて、従者を家に走らしめて、残れる鱈を湖に捨てさせけり。興義これより病愈えて、はるかの後、天年をもてみまかりけり。その終焉に臨みて、畫くところの鯉魚數枚を取りて湖に散らせば、畫ける魚紙繭を離れて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙を傳へて時に名あり。閑院の殿の障子に雞を畫きしに、生ける雞この繪を見て蹴たるよしを古き物語に載せ

閑院の殿  
左大臣藤原冬  
嗣の邸  
古き物語  
古今著聞集十  
一、圖畫の篇  
にある

たり。(雨月物語)

九 天明調

鶯の鳴くや小さき口あけて。	與	謝	燕	村
春の海ひねもすのたりくかな。	同			人
菜の花や月は東に日は西に。	同			人
富士ひとつ埋み残して若葉かな。	同			人
日はななめ關屋の鎗に蜻蛉かな。	同			人
水桶にうなづきあふや瓜茄子。	同			人
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者。	同			人



蹟筆村燕

我頭巾うき世  
のさまに似ず  
もがな  
華村



さみだれやあ  
る夜竊に松の  
月 蓼太

易水にねぶか流るゝ寒さかな  
山路來て向ふ城下や風の数  
橋落ちて人岸にあり夏の月  
寒月や我ひとり行く橋の音  
行燈をとぼさず春を惜しみけり  
山吹の忘れ花咲く清水かな  
馬借りてかはるゝに霞みけり  
五月雨や或夜ひそかに松の月  
碎けては三千丈や瀧の月

與謝蕪村

炭太 祇

同 人

同 人

高井几童

同 人

大島蓼太

同 人

同 人

蹟筆太蓼

かれ露の日に  
けり 關更

新井白石

名は君美、江  
戸時代前期の  
政治家(儒者)  
享保十年(一六  
九〇)歿、年六十

室鳩巢

名は直清、江  
戸の人、江  
戸時代前期の  
儒者、享保十  
七年(一七〇六)  
歿、年七十九

藩府  
加州藩の邸

八重霞日落ちて未だ夜ならず。  
あかつきや鯨の吼ゆる霜の海。  
人戀し火ともし頃を櫻散る。  
枯蘆の日にく折れて流れけり。

加藤曉臺  
同 人  
加舎白雄  
高桑關更

かたはるる乃日し  
あまのそし流に架りて

蹟筆關更

一〇 室鳩巢に寄す

新井白石

昨日の御報拜誦驚愕不及是非候。雖然火急の處に御全家御  
異事無き事此の上の多幸と可被思食候。當時御寓居藩府の中  
故御遠慮如何にも御尤もには存候。但し常の時と違ひたる事  
にも候。只今の事に候間中々少しも御容身などの所も難得可



將<sup>ニ</sup>獲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、勇<sup>シ</sup>犯<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>、天之<sup>ヲ</sup>  
 賜<sup>ル</sup>也、稽<sup>シテ</sup>首<sup>ヲ</sup>受<sup>ケ</sup>而<sup>シ</sup>載<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>  
 後<sup>ニ</sup>公<sup>子</sup>復<sup>シ</sup>還<sup>ル</sup>、侵<sup>ル</sup>曹<sup>氏</sup>、  
 衛<sup>ノ</sup>遂<sup>取</sup>五<sup>鹿</sup>、天<sup>事</sup>必<sup>象</sup>、  
 亦<sup>有</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>、嗟<sup>予</sup>雖<sup>モ</sup>老<sup>シ</sup>、  
 幸<sup>待</sup>ニ公<sup>ノ</sup>入<sup>ル</sup>觀<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>、日<sup>ニ</sup>忝<sup>ニ</sup>從<sup>ヒ</sup>、  
 子<sup>弟</sup>之<sup>後</sup>、簞<sup>盂</sup>洗<sup>爵</sup>、聽<sup>ク</sup>、  
 歌<sup>ニ</sup>鹿<sup>鳴</sup>、而<sup>笙</sup>南<sup>院</sup>、  
 以<sup>稱</sup>ニ壽<sup>ヲ</sup>於<sup>堂</sup>上<sup>ニ</sup>、尙<sup>未</sup>、  
 晚<sup>也</sup>、謹<sup>記</sup>、  
 享<sup>保</sup>辛<sup>丑</sup>夏<sup>六</sup>月、  
 筑<sup>後</sup>守<sup>源</sup>君<sup>美</sup>書

新井白石筆蹟

將<sup>ニ</sup>獲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、勇<sup>シ</sup>犯<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>、天之<sup>ヲ</sup>  
 賜<sup>ル</sup>也、稽<sup>シテ</sup>首<sup>ヲ</sup>受<sup>ケ</sup>而<sup>シ</sup>載<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>  
 後<sup>ニ</sup>公<sup>子</sup>復<sup>シ</sup>還<sup>ル</sup>、侵<sup>ル</sup>曹<sup>氏</sup>、  
 衛<sup>ノ</sup>遂<sup>取</sup>五<sup>鹿</sup>、天<sup>事</sup>必<sup>象</sup>、  
 亦<sup>有</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>、嗟<sup>予</sup>雖<sup>モ</sup>老<sup>シ</sup>、  
 幸<sup>待</sup>ニ公<sup>ノ</sup>入<sup>ル</sup>觀<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>、日<sup>ニ</sup>忝<sup>ニ</sup>從<sup>ヒ</sup>、  
 子<sup>弟</sup>之<sup>後</sup>、簞<sup>盂</sup>洗<sup>爵</sup>、聽<sup>ク</sup>、  
 歌<sup>ニ</sup>鹿<sup>鳴</sup>、而<sup>笙</sup>南<sup>院</sup>、  
 以<sup>稱</sup>ニ壽<sup>ヲ</sup>於<sup>堂</sup>上<sup>ニ</sup>、尙<sup>未</sup>、  
 晚<sup>也</sup>、謹<sup>記</sup>、  
 享<sup>保</sup>辛<sup>丑</sup>夏<sup>六</sup>月、  
 筑<sup>後</sup>守<sup>源</sup>君<sup>美</sup>書

有之候歟。  
 經史御覽  
 合せられ  
 て御身を  
 寄せられ  
 候方を同  
 じながら

令郎  
 長子椿壽

御心靜に御求め可然事に候。是より行先の事は必ず、天命  
 に委せ、兎角と御思惟に及ぶまじき事に候。流止行藏固より期  
 し難き事のみ候。但し、可惜事は多年御拮据候て御求め得し  
 御書籍と御手録此の物の事承り候だに心を苦しめ候。但し、是  
 も身より外の物不及是非候。貴兄業に御學業も成就候へば、是  
 より後書籍を恃みに恃まぬ事に候。令郎未だ御學問未成業の

監本四書  
 明の永樂帝勅  
 撰の四書大全  
 茅鹿門  
 名は坤、明の  
 學者、これは  
 八大家文鈔を  
 指す  
 史記  
 漢の司馬遷の  
 著した歴史  
 漢書  
 漢の班固の著  
 した歴史  
 與<sup>レ</sup>子<sup>同</sup>袍  
 詩經秦風の句

御事に候へば、せめて書雅をば御遺し候御謀の事強ちに俗輩買  
 田問舍等の事に比すべからず候。某家藏の書固より多からず  
 候へども、二重になり候もの少々有之候。書目の簿も何の内に  
 やらん入れ置き候故、昨夜尋ね候も知れず候へども、覚え候處は  
 監本四書茅鹿門史記漢書など有之候。則ち令郎へ之を進ずべ  
 く候。此の外の書恩賜の物の外は何にても御用次第御貸し可  
 申候。御事も缺かせまじく候。此の節手前の事御物語り申し  
 候通り故に、僅かの御用にも立ち候はぬ事口惜しく候へども無  
 力候。御恨など無之候はんか。猶恩賜の物可有之候。必ず必  
 ず御心置なく仰せ上さるべく候。廉潔を立て候も事にもより  
 相手にもより候。「與<sup>レ</sup>子<sup>同</sup>袍」と申すは此の事にて候。仰せ下さ  
 れ少しも御恥かしかるべき事にもなく候。必ず、子々たる  
 小丈夫の如く、又匹夫匹婦溝瀆に經れ候如き事は吾が儕あるま



深見 名は立信、幕府の儒官、錦里文庫、木下順庵の文庫

下村宏 號は海南、和歌山縣の人、明治八年生、法學博士、朝日新聞社事務取締役

じき事に候。深見翁事も何やかや焼失是亦居所に惑はれし事に候。錦里文庫は存し候由承知仕、せめてもの事に存候。是も麴町邊へ借宅あるべき由に候。それに今暫く御滞留候はば、何卒小舟になりとも辻駕籠になりとも御乗り候て、深川一色町と御尋ね御出でなさるまじく候や。一面に談じたき事のみ候。返すべし其許御引離れば旬日の間猶御猶豫の方まし候はんかと存候。不及貴報候。

尙々貴報被下候はば舊宅へ可被下候。今までの屋敷望み候人候はば、早々御貸し可然候。

自修文

一 拓川居士

下村 宏

三月二十六日逝去した松山市長加藤恆忠君は、居常一言一行多

三月二十六日 大正十二年

坎軻不遇

く非凡的で種々の話題を遺したが、君は食道狹窄症に罹つて再び起つことの出来ぬのを自覺するや、徐ろに後事を策し、去る一月中、自ら次のやうな墓標を認めた。

拓川居士墓表

居士、俗名、恆忠、松山人、大原觀山先生第三子、母、歌、松原陽先生女、妻、櫻村氏、生、三男二女、其所、愛、第二子先歿、居士性、素多恨、哀悼、致、病、終不起、年六十五、實、大正十二年○月○日也、遺命、葬于亡兒墓、側、居士少學、東爲司法省學生、三年見放、去遊佛國、學業未成、任外、交官、在職二十年、無聞、遂入帝國議會、有伴、食議員名、晚爲松山市、長、亦無所爲、蓋其志氣、過高、才學不足、一生坎軻、碌碌以終、哀哉。

拓川自撰并書

君は三十六日間絶食絶飲してゐたが、この間の體驗に對しては、絶食二旬、始知餓死之却樂、而生之極苦矣、非一經此境者、則不能



あはれ  
奥様「の」の  
とみち見ゆ病氣  
候、しかし追  
承り一先安  
心いたし候、  
猶ほ此上精  
々御自愛奉  
祈候、小生も  
又々生還幸  
に御放慮可  
被成下候、然  
處豚兒長病  
にて久敷御

加 藤 恆

拜啓奥様よ  
りの御懇書  
今夕拜見、御  
病氣の事始  
て承知驚入  
候、しかし追  
々御漸快と  
承り一先安  
心いたし候、  
猶ほ此上精  
々御自愛奉  
祈候、小生も  
又々生還幸  
に御放慮可  
被成下候、然  
處豚兒長病  
にて久敷御

共語此中味也。  
三月十二日 拓

明治三十五六年の交、君が「白耳義」ペルギーに公使であつた時、在留邦人は僅に今の久原鑛業會社の津村秀松博士、新潟市長の柴崎雪次郎君、彫刻家の武石弘三郎君、旭硝子會社の山田三次郎君、それに僕ぐらゐのものであつた。前後一個年餘、殆ど晝夜の別なく、吾々は公使館のお世

近處に入院  
致居り、折々  
駿河臺方面  
に參候故、其  
中御伺可申  
候得共、不取  
敢御見舞迄  
如此御座候、  
勿々頓首  
三月七夕  
恆忠再拜  
田中病兄  
尙乍端筆御  
奥様へ宜敷  
御挨拶奉願  
上候也

忠 筆 蹟

近處に入院  
致居り、折々  
駿河臺方面  
に參候故、其  
中御伺可申  
候得共、不取  
敢御見舞迄  
如此御座候、  
勿々頓首  
三月七夕  
恆忠再拜  
田中病兄  
尙乍端筆御  
奥様へ宜敷  
御挨拶奉願  
上候也

話になつた。拓川君の風格  
については既に定評がある。  
この間逸事奇譚も少くない  
が、今更事新しく僕が書立  
るまでもない。たゞ洒脱飄  
逸な盾の半面にも、頗る細心  
緻密な暖い深い情誼が潜ん  
でゐたことは、我々同人の竊  
に推服してゐた所である。  
在歐中の長い深い思出は  
凡べて省略して、君が病を獲  
てから病を病と思はぬ拓川  
一流の性格を遺憾なく發揮



したことについて一言しよう。

一粒の飯も喉を通らぬ病體を押し、國際聯盟の講演などに、隣縣高松にまで乗込んで壇上の人となつた君は、醫師にも見せぬ見せぬと頑張つてゐたが、到頭佐藤入澤諸國手の診察を受けて、賀古病院に入院したのは昨冬のことであつた。

三井物産會社の藤瀬政次郎君は、癌がんの疑が深く、親族知友は皆再び起たないと覺悟を極めた時、藤本重太郎君の斷案と療法は、不思議に起死回生の曙光となつて、絶望された藤瀬君は健康を恢復した。這般の消息を熟知してゐる僕は、万が一にも、藤本君の診察を受けて貰ふやう、二三回賀古病院の拓川君の病室に足を運んだ。或時、丁度松方正作君が先客として枕元にゐた。殆ど水藥の外は何も喉を通らない病人は、今、謝氏硯考を前に置いて、硯の話に餘念がなく、別に支那の地方別年代別に分類した紙數三十枚ぐらゐ

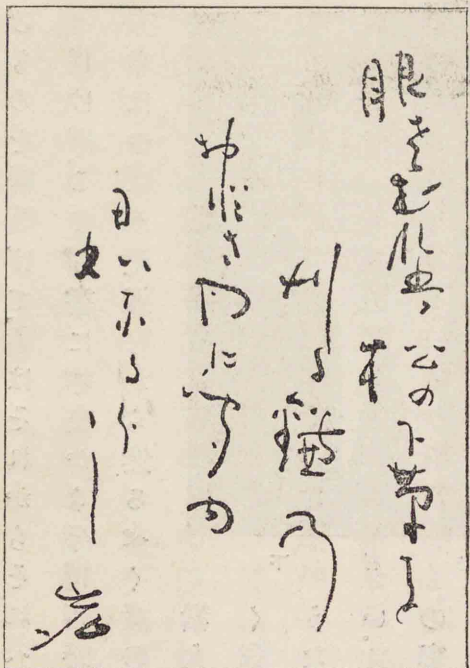


下村宏

のものを繰擧げて、話はそれからそれへと硯のことで止とどまがない。聞けば、この淨書に昨夜から今曉四時までかゝつたといふ。松方君はやはり硯通だから然るべく話の調子を合してゐるが、僕は素人なので、仕方なしに、然るべく調子を合せて聽いてゐるやうな態度を取つてゐる外はない。而も不治の難症に悩む君の窶れ果てた風貌に接しては、話してゐる本人の心持は暫く別として、松方君も僕も心竝に在らずで、何となく胸が一杯になつて來て、硯の話は絶間なく耳に入るが、全く心と耳とは離れはなれはなりになり、思はず涙が滲み出て來るのを禁じ得なかつた。



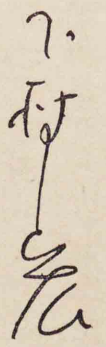
硯の話は約小一時間も續いた。絶えず受身になつてゐた松方君は、話の切目を幸に、漸くのことで、それでは失禮するが、下村君はどうお考へか知らぬが、病氣も大分面倒らしいから、市長の劇職は止めにされたらどうかと思ひますが……と、言葉を殘して席を辭した。



あとに残つた僕が用談にかゝらうと思ふと、病人はまた立て續けに、君の處に斯様かくくの硯がある筈だ。あれは僕が廣東の總領事館で、主人が臺灣へ行くので、民政長官へのお土産

眼さむれば松  
鎌の草とさや  
の下のとさや  
に開ゆし日  
宏

にするというたから、僕が選擇したのだよ。」  
と、僕の記憶から失せた話にまで這入込む。



漸くのことで話の途切れに、藤本君の診察談に及

下村宏自署

ぶと、君は診断の經過を事細かに話して、症状について精しく説明した。こんなことは茲にくだしく話すまでもないが、君は明に死病であることを自覺し、天命を俟つてゐることが看取された。藤本君のことも、藤瀬君のことも、君は既に承知してゐて、藤本君は醫師でもあり、旁主治醫と相談の上、宜しいといふことであれば喜んで診察して貰ふ」といふ話であつた。が、藤本君の診察は遂に受けることにならなかつた。また受けたとて君の命數は最早人力を以て左右することの出来る餘地はなかつたと思はれる。その内に、また山口子爵の名刺が見えた。「君、この人がまた大變な硯通でね」と、なか／＼の上機嫌であつたが、僕は病室の前に、對話時間十



分を越えぬやうとの、醫局の注意の貼紙があつたのと、松方君以來もう一時間、而も殆ど拓川君一人で間斷なく元氣さうに語り續けてゐることに想到して、失禮ではあつたが、新來の客と初對面の挨拶をかはして、松方君來訪以後の事情を山口子爵に傳へると、病人が横合から、嫌な客なら一分間でも閉口だが、好きな話なら一日ぶつ通しても平氣だよ」といふ言葉を後に聞流して、匆々席を辭した。死に面した故人の風格は、これまた既に知人周知の事實であらうと思ふ。たゞ君が辛うじて流動物だけで露命を繋いでゐる病床に於て、三十餘枚の硯に關する力作を徹宵執筆し、なほ訪問客に對し諄々と硯談をして倦まなかつた君の病中の思出の一節を録し、茲に謹んで哀悼の辭に代へたいと思ふ。

君病めるとき送りたる歌

病める友しのびて窓の戸を繰れば、

八つ手の葉越し雲ながる見ゆ。(新聞に入りて)

一 二 生活の深化

吉田 絃二郎

吉田絃二郎  
名は源次郎、  
佐賀縣の人、  
明治十九年  
生、早稻田大  
學講師

「たとひ全世界を與へらるゝも、爾その魂を失はば……。」と説いた  
〔基督〕  
キリストの言葉は、永遠に深化された生活の尊さを暗示する豫言  
者Oratorの聲である。

大抵の場合、全世界を掠奪し得たと思つてゐる人々は、その魂を失つてゐる。彼等は外的な世界の覇者である代りに、魂の世界の乞巧シヤウである。

私は再びキリストの言葉を持つて來なければならぬ。「人は神と財とに兼ね仕ふること能はず」といふ彼の言葉である。  
魂の世界に於て王者とならうと冀ふ者は、肉の世界に於て乞巧であることを覺悟しなければならぬ。生活の深化とは、畢竟する



精かにあつて進む

心法

こせくしや  
交

に、肉の世界の乞丐となることを辭しない大勇猛心モウを抱いて、自分の生活を魂の世界へと精進セイジンさせることである、日々の層々たる小さな自分の生活の裡に、魂の王國を見出さうとする内的生活の努力である。

私達の周圍には、今日有餘るほどの色々な實際問題が湧いてゐる。ブルジョア對プロレタリアの問題、小作人對地主の問題、勞働時間の問題、勞銀の問題、藝術對教育の問題、文化を中心としての社會改造の問題……このやうに考へて見ると、今日ほど激しい社會思潮の變動は、過去の歴史上にも容易に見出すことが出来ないであらう。その變動が大きいだけに、私達の生活上の不安、思想上の不安は、嘗て昔の人達が經驗したことの無いほど、深く痛切なものであるに違ない。  
恐らく、全世界を通じて、今日ほど凡べての人々の額に不安の影

ブルジョア  
有餘階級  
プロレタリア  
無産階級

が濃く刻みつけられてゐる時代は、嘗て歴史上になかつたことであらう。

過去の凡べての權威が疑はれ、新しい何等の信仰をも見出すことの出来ない不安、不信の日が永く續けば續くほど、私達の生活には暗い影が深くなつて来る。

野に立つて黙々として鋤を握つてゐる田園の若い人々の胸に、今日ほど痛切に實生活の問題が激しく食入つたことは嘗てなかつたらう。

幾百年の間靜に大自然の懷に抱かれて、桑の若葉を摘んでゐた少女達の胸に、今日ほど都會生活の蠱惑ゴウワクがひし〜と迫つて來た時代は嘗てなかつたらう。

郷邑の唯一つの魂の休息所であつた寺院は、屋根だけは昔のままに木立の中に聳えてゐるが、そこには魂の廢墟だけを見出すに



過ぎぬ。

今日の村落には、魂は殆ど失はれてゐる。嘗て或詩人は、悪魔は都會を造り、神は田園を造つた。と歌つたが、私達は果して今日の田園生活の中から神を見出すことが出来るだらうか。素朴な田園生活の唯一の矜持であつた魂の生活が荒廢しつゝあることは、誰も拒むことが出来ぬ。

けれども、私達は絶望してはならぬ。新しい殿堂を打建てるためには、舊い殿堂を毀さなければならぬ。秋の靜かな空を持つためには、幾回かの暴風雨を経なければならぬ。暴風雨が大きいれば大きいほど、暴風雨の後の秋の空は深く高く澄む。

生活の深化は、暴風雨の後の、更に深く更に高くされた秋の靜かな蒼穹を経験することである。

私達は時代思潮の暴風雨を恐れてはならぬ、また避けてはならぬ。

ぬ。暴風雨の恐しい威力に面接して行くことによつて、森の病葉を振り落さなければならぬ。私達の生活面を凝滞させてゐるところの暗い影を振ひのけなければならぬ。



親 鸞 上人

昨日は生きて社會の力として働いてゐたものも、今日には必ずしも生きてはゐない。生きてゐる間こそ、すべての傳習、凡べての約束は、私達を生かすものであるが、それが一つの死殻となつた場合に、却つてそれは私達の生活の牢獄となる。

生活の深化は、絶えず死殻を破つて、新しい生活面を見出すこと  
でなければならぬ。



生活の深化は、念々刻々生活に對する感謝と執着と愛撫とを忘れないところから生れて来る。  
「人生は嚴肅である」といふ心持を本當に味ふものでなければ、生活深化の味を知ることは出来ぬ。

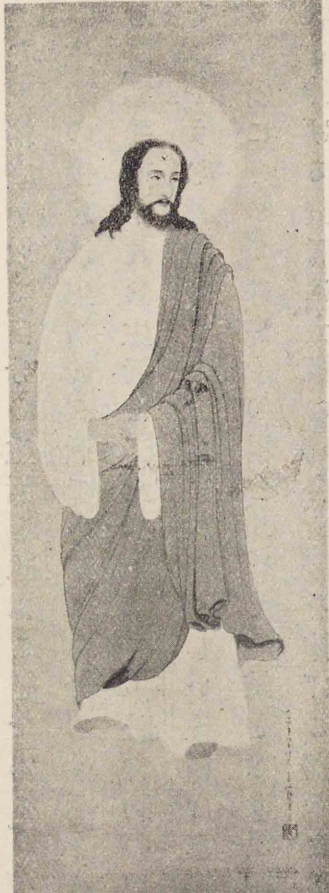
人生を茶化すものにとつては、人生は下手な役者の道化芝居に過ぎぬ。釋迦にとつて、親鸞にとつて、キリストにとつては、人生は即ち涅槃であり、淨土であり、天國であつた。イスカリオテのユダにとつては、人生は僅に三十枚の銀の値しか持たなかつた。

生活の深化は、私達の心の裡に、キリストの心を持ち、釋迦の心を持つて人生を享樂することであり、生活を經驗することである。俗物にとつては、人生は、パンだけの、或はまた富だけの世界である。聖徒にとつては、人生は魂の尊い殿堂である。

生活の深化は、この俗物の心に打克つて、聖徒の心を慕はうとす

親鸞 鎌倉時代の高僧、真宗の開祖、弘長二年(一一三二)歿、九十二歳  
イスカリオテ ユダの姓  
ユダの姓  
キリストの叛逆者

る忍苦の行爲から生れて来る。生活の深化は凡人淨土である、日常の平凡な生活の刻々裡に淨土を發見して行くことである。生活の深化は凡人の生活の救である。



(筆仙墨田島)トスリキ

「善人なほもて往生を遂ぐ。いはんや悪人をや。」  
親鸞のこ

の言葉は、凡人の救濟であり、凡人の淨土である。悪人なればこそ救はれる。凡人なればこそ淨土をも踏むことが出来る。私達は、ダンテの「煉獄」の中に、幾多の學者や高僧や權勢家達が、或者は木に挾まれ、或者は石を擔いで苦しんでゐるのを見る。救はれるもの

煉獄 曲「中の一」神



は、常に本當に罪を悔いるところの凡人である。

生活の深化は、凡人が凡人の心を以て、凡人の生活を嚴肅に生きることである。換言すれば、私達が自分々々の立場に於て、最も人間らしい生活を生きることである、最も人間らしい素直な心と素直な感情とを以て、自分の生活を味ふことである。

生活の倦怠は生活の煉獄である。自分の生活を踴躍して楽しむ時、私達の平凡な生活に淨土が生れる。社會的地位、名望、富といふやうな外的條件は、本當に人間らしい生活を享樂しようとするものにとつては、多くの場合、却つて荆棘となり足枷となる。一燈を捧げる貧者は、大抵の場合、万燈を捧げる富者よりも、本當の淨土を見出すことが出来るであらう。

しかし、貧しいが故に必ずしも淨土を見出すことが出来るといふ譯ではない。また富むが故に必ずしも淨土を見出し得ないといふ譯ではない。

いふ理由もない。要は、私達がどれほど貧富榮辱の觀念から超然として脱離し得るかといふ點に淨土の現不現がある。言ひかへれば、どれだけ眞率に自分の人間的生活を思索し享樂し得るかといふ點に淨土の影の濃淡がある。

私達は何よりも最初に自分の生活を眞劍に享樂することを知らなければならぬ。現在生きてゐることの喜を、獻歎するほどに痛感する人とならなければならぬ。生の悲みの中に、生の苦みの中に、更に一層の生の深さを見出すほどの大膽さと親切さとを抱いて、生そのものの味を噛みしめなければならぬ。

親しい人々の死の中にも、病の中にも、禍の中にも、生の無限の閃きは動いてゐる。生そのものの眞實の姿は、喜の中にも閃いてゐる。しかし、生そのものの實相は、悲みの中に更に一層力強く生きてゐる。



生活の深化は、素つ裸な人間の生一本な生活を目當としてゐる。どの深さまで生の味を噛みしめ得たか、どの深さまで生の喜と涙の苦しさを味ひ得たかといふことが、私達の生活を淺薄にもし深刻にもする。

淨土は一つではない。万人が救はれたとしても、万人が万人悉く違つた淨土を経験しなければならぬ。淺い喜の淨土、深い喜の淨土、それ〴〵に私達の生活深化の程度につれて、色々な淨土が生れて来る。

今日の淨土よりも明日の淨土は更に深く尊くなければならぬ。私達の淨土は絶えず進化して行く。

以上私は自己生活の内省、自己生活の靜かな思索から生れて來る生の救について述べたが、生の救は單に野狐禪的な無爲の瞑想からだけ生れては來ない。自己の生活を深く掘つて、生そのもの

contents

誰も掘つてゐる

の相を掴まうとする本然的な欲求の中には、必ず隣人と自分自身とを結びつける人類的な愛、人類的な理解といふやうな感情が動いてゐる。

本當に人間らしい生活を、最も人間らしく生きて行かうとする意識の中には、常に隣人と結び、隣人と扶けあはうとする本然的な愛の心が動いてゐる。

生活の深化は、自分一個の生活の底に徹して、生そのものの實相を凝視すると同時に、隣人と自分との間に結ばれて來る人間的な愛の交渉を條件としなければならぬ。

深く生きるといふことは、自己の生活の省察であると同時に、他

△  
私の生活の抱擁を意味する。  
郷邑のために自分の一身を捧げる人々は、一身のためにだけ生きる人に對して、幾十倍の淨土を見出すことが出来る。更に全人



類のために自己を捧げることの出来たキリスト或は釋迦が見出した淨土は一村のため一郷のため一家のために自己を捧げることの出来る人々の心の中に潜んでゐる。

私は、或山國の小さな學校に、二十人足らずの村童のために一生を捧げようとしてゐる若い教育家を知つてゐる。また私は、粗末な綿服を身に纏うて、或時は人々のために托鉢し、或時は人々のために終日勞力を捧げて、貧しい數椀の報謝を感謝して受けてゐる中年の宗教家を知つてゐる。この人々の生活の中にこそ、キリストの天國、釋迦の涅槃が生きてゐる。

村の人々のために一つの石を道から取捨ててやる勞力の中にも生活の淨土はある。村の風致のために一莖の草花を植付ける親切心の中にも人生の淨土はある。

生活の淨土は自分の心を外にしては見出すことが出来ぬ。生

西田三三三

活の淨土は自分の隣人を忘れては見出すことが出来ぬ。自分等の村、自分等の集團を除いては生活の淨土はない。

出来るだけ美しい村、出来るだけ居心地のよい村、出来るだけ人の心の温い村を作り出す努力の中に生活の淨土がある。一國を司るもののの生活に必ずしも淨土が潜んでゐるとは限らぬ。一つの小さな村のために自己を捧げる青年の心の中に眞實の淨土が潜んでゐる。或は不運な一人の女を救ふことの中にも淨土は存在する。

私達がどれほど嚴肅な心を抱いて人生を見ようと努めるか、また私達がどれほど眞劍になつて隣人を愛し得るかといふことの中に、生活の救がある、生活の淨土がある。

私達は二度とこの人生に歸つて來ることは出来ぬ、二度と隣人とめぐり逢ふことは出来ぬ。このことを思つたならば、人生を粗



末に考えることは出来ぬ、隣人を憎むことは出来ぬ。一日の生命を與へられることの中にさへ無限な自然の恩恵がある。たゞ一人の隣人を見出し得たといふことの中にさへ無限の悦が潜んでゐる。

或日一人の詩人は乞丐に出會つた。乞丐は詩人に金を乞うた。しかし、詩人は生憎一厘の金も持合せてゐなかつた。詩人は乞丐の手を握つて、友よ、赦してくれ。今日は一厘の金も持たない。といった。乞丐は詩人の言葉とその態度とに涙を流して喜んだ。この刹那に詩人と乞丐の魂は最も美しい眞人間の浄土を見出したに違ない。

浄土は金では買はれぬ。浄土は眞人間の心と涙とを以て購はなければならぬ。生活の深化とは、畢竟眞人間の心と涙とを以て日々の生活の中に浄土を見出すことである。(麥の丘)

一三 赫夜姫の昇天

かゝるほどに、宵打過ぎて、子の刻ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて降りきて、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戦はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てんとすれども、手に力なくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの念じて射んとすれども、とざまへ往きければ、荒れも戦はで、心地たゞしれに、しれて守りあへり。立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、造鷹家にまうで來、といふに、猛く思ひつる造鷹も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。天はいはく、汝幼き人、聊かなる功德

延喜の御  
御宿の中より夜右  
薄御兵 三十一人  
渥鏡二様 夜姫ヲ入ル  
さかし | 腹  
さかし | 腹  
さかし | 腹

一三 赫夜姫の昇天  
竹取の翁の仇



長き月

を翁つくりけるによりて、汝が助にとて、片時のほどとて降ししを、  
 そこの年の比、そこの金の賜ひて、身を換へたるが如くなりけり。  
 赫夜姫は罪を作りたまへりければ、かく賤しきおのれが許にしば  
 しおはしつるなり。罪のかぎり果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣  
 きなげく、能はぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、  
 「赫夜姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに怪  
 しくなり侍りぬ。また、ことどころに赫夜姫と申す人ぞおはしま  
 すらん」といふ。「こゝにおはする赫夜姫は、重き病をしたまへばえ  
 出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車  
 を寄せて、いざ赫夜姫、穢き所にいかで久しくおはせん」といふ。た  
 てこめたる所の戸即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなく  
 してあきぬ。姫抱きてゐたる赫夜姫外に出でぬ。え留ままじけ  
 れば、たゞ差仰ぎて泣きをり。竹取心まどひて泣伏せる所に寄り



赫夜姫いふこゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見  
 送りたまへ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らん。我をいか  
 にせよとて棄てては昇りたまふ  
 ぞ、具しておはせぬ」と泣きて  
 伏せれば、御心まどひぬ。「ふみを  
 書きおきて罷らん。戀しからん  
 をりく取出でて見たまへ」とて、  
 打泣きて書くことは、この國に生  
 れぬるとならば、歎かせ奉らぬほ  
 どまで侍るべきを、侍らで過ぎわ  
 かれぬること返すく本意なく  
 こそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣を  
 形見と見たまへ。月の出でたら



ん夜は見おこせたまへ。見棄て奉りて罷る空よりも墜ちぬべき心地す。」と書きおく。天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入り。またあるは不死の薬入れり。一人の天人いふ「壺なる御薬奉れ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地あしからんものぞ。」と持てよりたれば、聊か嘗めたまひて、少し形見とて脱ぎおく衣に包まんとすれば、或天人包ませず、御衣を取出して着せんとす。その時に赫夜姫、しばし待て。」といひて、「衣着せつる人は心ことになるなり。」といふ。「物一言いひおくべきことあり。」といひて文書く。天人遅しと心もとながりたまふ。赫夜姫、物知らぬことな宣ひそ。」とて、いみじく静におほやけに御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。「かく數多の人をたまひて留めさせたまへど、ゆるさぬ迎まうで来て、取りゐてまかりぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕つかまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思召しつらめども、

しもの  
不ふあ  
侍る

見おこせ

空よりも墜ちぬべき

心強くうけたまはらずなりにしことなめげなるものに思召しとどめられぬるなん、心にとまり侍りぬる。」とて、今はとて天の羽衣着る折ぞ、君をおはれと思ひ出でぬる。使役とて、壺の薬添へて、頭中將を呼びよせて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁をいどほしがなしとおぼしつることも失せぬ。この衣着つる人は物思もなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後、翁、血の涙を流して惑へどかひなし。かの書きおきし文を讀みて聞かせけれど、何せんにか命も惜しからん誰がためにか何事もやうもなしとて、薬も食はず、やがて起きもあがらで病み臥せり。中將人々を引具して歸り参りて、赫夜姫をえ戦ひ留めずなりぬることを細々と奏す。薬の壺に御文添へて参らす。披げて

のら

君をおはれと思ひ出でぬる。使役

さう  
益  
えこり



もはや蘇夜姫のあふりもなき  
現代國語讀本 卷十

公卿  
三佐以上四位上

御覽じて、いといたくあはれがらせたまひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣上達部を召して、いづれの山か天に近き。と問はせたまふに、或人奏す、駿河國にある山なん、この都も近く、天も近く侍る。と奏す。これを聞かせたまひて、逢ふことも涙に浮ぶ我が身には、

死なぬ薬も何にかはせん。

かの奉る不死の薬の壺に御文具して、御使に賜はす。勅使には調岩笠といふ人を召して、駿河國にあなる山のいたゞきにもて行くべき由仰せたまふ。峯にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃すべき由仰せたまふ。その由承りて、つはものども數多具して山へ登りけるよりなん、その山をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立昇るとぞいひつたへたる。(竹取物語)

高山樗牛

名は林次郎、山形縣の人、文藝評論家、文學博士、明治三十五年歿

一四 月夜の美感

高山樗牛

月光の色相が吾人の心に惹き起す感情は、その内容に於てこそ沈鬱悲哀なれ、その形式に於ては不定にして、それが沈鬱悲哀の對境については何等明確なる意識あるなし。只何となく思ひ沈み、只何となくうら悲しきのみ。譬へば、野も山も共に月の一色に塗抹せらるゝが如く、我が心にも亦一種悲哀の調子の響き渡るを覺ゆるなり。若し人の心に快潤と沈鬱の兩面ありとせば、沈鬱の一面は此の悲哀の響に共鳴して、優しき、悲しき、哀れ深き、その他之に類せる諸の情緒に開發の機會を與ふ。月見ればちゞに物こそ悲しけれ。とは、這般の心情を歌ひたるものなるべし。されど、斯くして起されたる感情は、初の中こそ定かならざれ、それが開發するに隨ひて、終には一個の具象的形式を得ざれば已まざるべし。而して此の定かならざる感情に具象的形式を與ふるものは即ち聯想なり。

月見れば  
物こそ悲し  
けれわが身  
はあつねど  
あらねど古  
今



聯想にも種類あり。観る人の性格・閱歷・境遇によりて固より一様ならざるべきも、何人の念頭にも先づ浮ぶべきは、自然と人生との對比なるべし。この世にはあるまじき月の光の清らかなる、蒼茫たる天空の心ゆくばかり美しく且限りなき、山川の依稀として無言の静寂を保てる、平和のおもかげ、悠久のしるし、いづれか現世の好對比にあらざるべき。始なく終なき自然の美しき大觀に面すれば、人生の事業のいかに哀れにまた見すばらしく見ゆべきぞ。名利得失・成敗・生死、あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短生命を擧げて、この煙火の巷に齷齪し悲喜することの寧ろ滑稽にも見ゆべきなり。斯くの如きは月夜の感慨中最も普通に見る所にして、また吾人の道徳的感情の上にも最大なる影響を及ぼすものなり。自然と人生との對比について最も著しき聯想は、過去の追想若しくは遠人の思慕なるべし。

江畔の句  
唐の張若虚の  
春江花月夜と  
題する長詩中  
の句

李太白  
名は白、唐の  
大詩人（李白）

江畔何人初見月  
人生代代無窮已

江月何年初照人  
江月年年望相似



李太白（晚笑堂畫傳）

こは何人も知れる張若虚が詩中の句にあらざるや。天地の悠久に比して人生の須臾なるを歎ぜるが中に、過去の追憶をも交へて、感慨のうたゝ永きを覺ゆ。殊に李太白が有名なる「把酒問月の詩の如きは、最も痛切にこの感慨を現せりと謂ふべし。

青天有月來幾時  
人攀明月不可得  
今人不見古時月

我今停杯一問之  
月行却與人相隨  
今月曾經照古人

（中略）



古人今人若流水。 共看明月皆如此。  
唯願當歌對酒時。 月光長照金樽裏。

國破れて山河在、  
城春草木深、  
感時花濺淚、  
恨別鳥驚心、  
烽火連三月、  
家書抵萬金、  
白頭搔更短、  
渾欲不勝簪、  
春望、  
杜甫

我が眺むる月は昔の人にも眺められたる月なりとの意識は、昔に過去世の觀念を實にして同情の強さを増す力あるのみならず、月そのものに對しても、また一種の親しき他ならぬ感情を覺ゆべしされば、月を介して我は直ちに古人の心情を感得する想あるなり國破れて山河ありといふとも、而も天上の明月の長へに渝らざるに較べなば、山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。されば、人生古今の盛衰を瞰下して、而も自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは極めて自然のことなるべく、月によりて遠人を懷慕する情も同一の起原を有すべし。過去世の追憶、遠人の思慕、此等は月夜の聯想として、恐らくは何人も覺えあることならん。この聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる

後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふる力あり。諸の詠歎はこの聯想の糸を辿りて、一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふべし。(樗牛全集)

一五 万葉集の歌

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

ひむがしの野にかざろひの立つ見えて、かへり見すれば月傾きぬ。

山上臣憶良在大唐時憶本郷歌

いざ子どもはやもやまとへ大伴の三津の濱松待ちこひぬらむ。

有馬皇子御歌

家にあれば筭に盛るいひを草枕旅にしあれば椎の葉



に盛る。

柿本朝臣人麿歌

近江の海夕浪千鳥なが鳴けば、心もしぬに古おもほゆ。

太宰少貳小野老朝臣歌

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふが如く今さかり

なり。

山上臣憶良罷宴歌

憶良らは今はまからむ子泣くらむ、そのかの母も吾を  
待つらむぞ。

笠朝臣金村鹽津山作歌

大夫の弓末ふりおこし射つる矢を、後見む人は語りつ  
ぐがね。

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野

川多藝津河内爾高殿乎高知座而上立國見

乎為波壘有青垣山山神乃湊御調等春部者

花神頭持秋立者黃葉頭刺理一云黃葉遊副

川之神母大御食爾任奉等上瀬爾鶴川乎立

下瀬爾小網刺渡山川母依氏奉流神乃御代

鴨

山川毛因而奉流神長柄多藝津河内爾船出

為加母

時にあへらく思へば。

厚見王歌

かはす鳴く神なび河にかげ見えて、今や咲くらむ山吹

山上臣憶良沈瀨

之時歌

をのこやも空しかる

べき名は立たずして

海犬養宿禰岡麿

應詔歌

御民われ生けるしる

しあり天地の榮ゆる



の花。

遣唐使、船發難波入海之時、親母贈子歌

旅人のやどりせむ野に霜降らば、我が子はぐくめ天の  
田鶴群。

山部宿禰赤人歌三首

春の野にすみれ摘みにと來し吾ぞ、野をなつかしみひ  
と夜ねにける。

吾がせこに見せむと思ひし梅の花、それとも見えす雪  
の降れば。

明日よりは若菜つまむとしめし野に、きのふもけふも  
雪は降りつゝ。

大伴宿禰家持翁族歌

しきしまの大和の國にあきらけき名におふとものを  
心つとめよ。  
つるぎたちいよ、磨ぐべし古ゆ、さやけくおひて來に  
しその名ぞ。

一六 万葉の歌人

賀茂 眞淵

柿本朝臣人麻呂は、いにしへならず、後ならず、一人のすがたにし  
て、荒魂和魂いたらぬ隈なんなき。その長歌、いきほひは雲風にの

あきらけき名におふとものを  
心つとめよ  
つるぎたちいよ、磨ぐべし古ゆ、さやけくおひて來に  
しその名ぞ

賀茂眞淵

賀茂眞淵筆蹟

賀茂眞淵  
遠江國の人、  
江戸時代後期、  
の國學者、  
和六年(西三  
致、年七十

もろこしの  
に見せばや  
よしののよ  
の山のはな  
のさかりを  
賀茂眞淵



りてみそら行く龍のごとく、ことばは大海の原に八百潮のわくがごとし。短歌のしらべは、葛城のそつ彦真弓を引きならさんなせり。ふかき悲みをいふときは、ちはやぶるものをも泣かしむべし。山上臣憶良は、ことばふつゝかにして、心うつくし。久米のとも雄々しきすがたして、立ちながら舞ふがごとし。山部宿禰赤人は、人麻呂とうらうへなり。長歌は心もことばもたゞに清らをつくせり。短歌こそこれも一人のすがたなれ。たくみをなさず、あるがまに、いひたるがたへなる歌となりしは、本の心の高きが至りなり。たとへば、檳榔びんぼうの車して大路をわたるぬしの、あから目もせぬがごとし。大伴宿禰家持のぬしは、事をよくしるして、にはひなし。たとへば、いでましの大みともの行ゆきをめたく記せるふみのごとし。短歌はいと多かれど、あらびて、うらぐはしきはまれになんある。



(筆次勝佐岩) 磨人本柿



柿本人麿は奈良朝時代の歌人で、その名は一に人丸に作る。傳記は詳かでない。その生國は大和とも石見ともいふ。持統・文武の兩朝に歷任し、新田部高市の諸皇子に隨從し、また鳳輦に陪して近畿の名勝を探り、また遠く伊豫・筑紫の諸國に遊んだ。晩年は石見國に居り、遂にそこで歿した。生年も歿年も不明であるが、和銅二年とも三年ともいふ説があり、五十餘歳であつたらうといふ。人麿は奈良朝時代の歌人の先達で、山部赤人と名を齊しうし、後世二人を稱して歌聖といふ。

三木露風  
名は擧、兵庫  
縣の人、明治  
二十三年生、  
詩人

自修文

一七 必讀の古典

三木 露風

近頃、文學に志す若い人々は、あまり古典を讀まないやうである。古典を讀まないといふと文學的頭腦が出来ない。新聞や雑誌の文學欄だけを讀んで文學に携はるといふことは、甚だ心細いことである。古典を讀んで十分これを味へば、文學的頭腦も出来るし、文學の基礎も築かれる。

しかし、古典は新しい文學のやうに生き／＼した刺戟を與へないから、最初は興味を起し難いし、また現代語とはよほど縁遠い言葉や文體で書かれてゐるので、とかく親しみにくいものである。そこで、文學に志すものは、先づ古典に對する興味を喚起することが大切である。初は親しみにくいやうでも、辛抱強く讀んでゐる中には、自然にその味が解つて來る。古典は盡きない生命を有



してゐるから、一旦その味が解つて來ると、飽くことを知らないやうになる。苟も古典になるほどのものでなければ、眞の文學といふことは出來ぬ。言語や詞姿のやうなものは時代によつて變遷するけれども、文學の眞の生命は永遠に朽ちない。永遠の生命を有するものであつてこそ、始めて古典となることが出来るのである。これが古典の尊重すべき所以で、また文學に志すものが古典を讀まねばならぬ所以である。

さて文學に志すものの必ず讀まねばならぬ古典は万葉集である。万葉集は藤原奈良朝時代に於ける我等が祖先の一大綜合詩集で、日本民族の詩歌の精神である。万葉集には長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌せうづか六十一首、合計約四千五百首の歌が收めてある。作者には、専門的の詩人は勿論、一般の人も少くない。かやうに國民的特色を具へてゐることも、また万葉集が普遍的古

典として誰でも讀まねばならぬ理由である。日本の詩はその源を万葉集に發してゐる。短歌は勿論、今日の長詩も、その精神からいへば、万葉集の長歌を新しい意味に於て復興したものである。元來長い形の詩は、國民の感情が旺盛で充實した時に生れるものである。奈良朝時代は國民の



三 感情が熱烈で積極的であつたか  
木ら、あのやうに詩歌の花が咲いた  
露 のである。特に長歌はその時代  
風の感情を最も能く最も強く現し  
てゐる。これに反して、平安朝以

後は國民の感情が消極的に傾いたために、長い形の長歌は衰微するやうになつた。その上、詩歌は國民一般のものではなくなり、主として堂上貴族の間に多く行はれて、その美的生活を飾るものと



村田春海  
江戸の人、  
江戸時代後期  
の文筆家、  
文化の  
八國學者、  
八年(一八七  
六)に没す

なり、短歌だけが行はれるやうになつた。そして、徳川時代に及んで、古學復興派の村田春海などは盛に長歌の振興を唱へたけれども、時勢はやはり鎖國的で消極的であつたから、國民の内面の動きが缺けてゐたため、長歌は遂に勃興しなかつた。明治大正時代は革新の時代、動きの時代、目覺めの時代で、國民の感情が鮮に活動してゐるから、この感情を表現するには、どうしても長い形の歌を必要とするやうになつた。もとより歐米の詩形から暗示を受けた點もないではないが、長詩は必ず内面感情の動きによるものであるから、この點からいへば、今日の長詩も短歌と同じく万葉集にその傳統の流を發見することが出来る。そこで、文學に志すものは必ず万葉集を研究する必要がある。それは單に詩歌を鑑賞するためばかりでなく、詩歌を通じて、我々祖先の表した純眞熱烈で赤裸々な人間の心、及び我々日本民族といふものを深く知ること

が出来来るからである。

万葉集と同時に讀むべき古典は古事記である。古事記は日本書紀とともに我が國上古の歴史を書いたものであるが、古事記の方が簡古素朴な點に於て日本書紀より遙に優れてゐる。古事記は經典として見られるべきものであるが、それよりも文學として見た方が興味が一層深い。元來古神道は理智的に解すべきものでなく、詩的に觀るべきものである。古事記が文學として興味が深いといふのはこれがためで、またこれが文學に志すものの必ず讀まねばならぬ理由である。(詩歌の道)

一八 千貫目

井原 西鶴

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人、隨に千貫目御座候。廣き世界に並びなき分限我なりと自慢申せし。仔細

井原西鶴  
大阪の人、江  
戸時代前期の  
小説家、元禄  
六年(一六五  
五)に没す  
室町  
今の京都市烏  
丸通



烏丸通  
今の京都驛前  
を北に通ずる

は二間口の棚借にて千貫目持都の沙汰になりしに、烏丸通に三十  
八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家  
持となり、是を悔みぬ。今までは借屋にゐての分限といはれしに、  
向後家あるからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。

この藤市利發にして、一代の中に斯く手前富貴になりぬ。第一、  
人間堅固なるが身を過ぐる本なり。この男家業の外に反故の帳  
を括り置きて見世を離れず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢  
小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合せ、生薬屋、呉服屋の若い  
者に長崎の様子を尋ね、練綿、鹽酒は江戸棚の狀日を見合せ、毎日万  
事を記し置けば、紛れしことは爰に尋ね、洛中の重寶になりける。

不斷の身持肌、單襦袢、大布子綿三百目入れて、一つより外に着  
ることなし。袖覆輪といふこと、この人取りはじめ、當世の風俗  
見よげに始末になりぬ。革足袋に雪沓を穿きて、終に大道を走り

鳥部山  
京都の東、古  
來の火葬場

大佛  
京都方廣寺の

ありきしことなし。一生の中に、絹物としては海松茶染にせし紬一  
つ。若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定  
めず、土用干にも疊の上におかには置かず、麻袴に鬼縑の肩衣、幾年  
か折目正しく取置かれける。

町並に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人よりあとに  
歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引いて、これを  
蔭干にして、腹藥なるぞと、たゞは通らず、躓く處で燧石を拾ひて袂  
に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづかやうに氣を附  
けずしてはあるべからず。

この男、生れついて吝きにあらず。万事の取廻し人の鏡にもな  
りぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の  
人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、これも利勘にて大佛の前  
へ誂へ、一貫目につき何程と極めける。十二月二十八日の曙、急ぎ



東寺  
京都の南端九  
條にある

荷ひつれ、藤屋見世に並べ、請取り給へ」といふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那はきかぬ顔して、算盤置きしに、餅屋は時分柄に隙を惜しみ、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、ちきのみりんと請取りて歸しぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅屋請取つたか」といへば、はや渡して歸りぬ。「この家に奉公する程にもなき者ぞ。濫もりのさめぬを請取りしことよ」と、また目を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折つて、喰ひもせぬ餅に口をあきける。

その年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大きながあり」と、心を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳、柊、櫻、桃の木、花菖蒲、薺、苺、苡仁など取りまぜて植

源氏  
源氏の物語、紫  
式部の著、平  
安朝の代表文  
學、五十四帖  
伊勢物語、一  
在原業平一生  
の行事を潤色  
した物語、二  
卷

多田の銀山  
攝津國河邊郡  
多田村にある  
鑛山

置きしは、一人ある娘がためぞかし。葭垣に自然と朝顔の這ひかかりしを、同じ眺にははかなき物とて、刀豆に植ゑかへける。何より我が子を見るほど面白きはなし。娘大人しくなりて、頓て嫁入屏風を拵へ取らせけるに、洛中盡くを見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。源氏、伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。この心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なることを見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。節句の雛遊をやめ、盆に踊らず。毎月髪かしらも自ら梳きて、身の取廻し人手にかゝらず。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゞやかせ、娘を附け置き、



露地の戸の鳴る時知らせと申し置きしに、この娘しをらしく畏り、  
燈心を一筋にして、物申の聲するとき、元の如くにして勝手に入り  
ける。三人の客座敷に着く時、臺所に播鉢の音響き渡れば、客耳を  
悦ばせ、これを推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや、始めてなれば  
雑煮なるべし」といふ。また一人はよく考へて「煮麵」と落着きける。  
必ずいふことにしてをかし。

藤市出でて三人に世渡りの大事を物語して聞かせける。一人  
申せしは「今日の七草といふいはれは如何なることぞ」と尋ねける。  
「あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ。」また一  
人「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ねぬ。「あれは朝夕  
に肴を食はずに、これを見て食うた心せよといふことなり。」また  
太箸をとる由来を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一  
年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり。よくよく万事に

氣をつけ給へ。さて宵から今まで各話し給へば、最早夜食の出づ  
べき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の播鉢の音は大  
福帳の上紙に引く糊を播らした」といはれし。(日本永代藏)

### 一九 小野の深雪

昔、惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無  
瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りには、その宮になん  
おはしましける。その時、右馬頭なりける人を常にゐておはしま  
しけり。狩はねもごろにもせで、大和歌にかゝれりけり。今狩す  
る交野の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木の下におりゐて、  
枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。右馬頭なり  
ける人、  
世の中にたえて櫻のなかりせば、

惟喬親王  
子 文徳天皇の皇  
山崎  
攝津國  
右馬頭  
在原業平  
交野  
河内國



春のこゝろは長閑けからまし。  
となん讀みたりける。又、或人の歌、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、

憂き世になにか久しかるべき。

とて、その木の下は立ちて歸る  
に、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせたまひぬ。

夜更くるまで物語して、さてあ

るじの皇子入りて大殿ごもり

たまひなんとす。十一日の月

も隠れなんとすれば、かの右馬



在 原 業 平

頭よめる、

あかなくにまだきも月のかくるゝか、

小野  
山城國

山の端にげて入れずもあらなん。

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、皇子おもひの外に御髪  
おろさせたまひて、小野といふ處に住みたまひけり。正月に拜み  
奉らんとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。  
強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれにいと物悲しくてお  
はしましければ、やゝ久しく侍ひて、古のことなど思ひいできこえ  
けり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけごとどもありけれ  
ば、え侍はで、夕暮に歸るとて、

忘れては、夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見んとは、

とてなん泣くゝ來にける。(伊勢物語)

二〇 古文斷片



一 わかれ

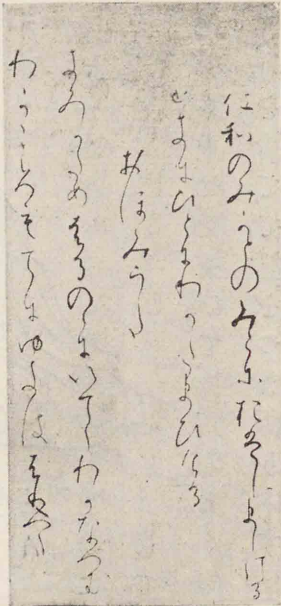
かくて漕ぎゆくまに、海のほとりにとゞまる人も遠くなりぬ、船の人も見えずなりぬ、岸にもいふことあるべし、船にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、此の歌をひとりごとにしてやみぬ。思ひやること、ろは海をわたれども、

ふみしなれば知らずやあるらん。(土佐日記)

二 風は

野分のまたの日こそいみじうあはれにおぼゆれ。立部透垣などのふしなみたるに、前裁ども心苦しげなり。大きな木ども倒れ、枝など吹折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへによるぼひ這伏せる、いと思はずなり。格子のつぼなどに、さときはをことさらにしたらんやうに、こまゝと吹きいりたるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえぬ。(枕草子)

仁の和のみのみか  
おどはのしこみ  
ひけはのしこみ  
おたはのしこみ  
みおはのしこみ  
のほまのしこみ  
かかたのしこみ  
わがはのしこみ  
つにわするき  
いゆがわのしこみ  
きはるもついで



蹟筆(者著記日佐土)之頁紀

三 遺言

この姫君たちをすゑなめて泣くく、のたまひける、としごろ佛神にいみじく仕うまつりつれば、何事

もさりともとこそたのみ侍りつれど、かくいふがひなき死にをさへせんことの悲しさ。かく知らましかば、君たちをこそわれよりも先に先せたまひねと祈り思ふべかりけれ。おのれ死なば、いかなるふるまひありさまをしたまはんずらんと思ふが悲しく、人わらはれになるべきこと。といひつゞけて泣かせたまふ。怪しきありさまをもしたまはば、なき世なりとも怨みきこえんずるぞ。とぞ、母北の方にも泣くく、遺言したまひけるかし。(天鏡)

四 薬師佛



東路の道のはてよりもなほ奥つ方に生ひいでたる人、いかばかりかはあやしかりけんを、いかに思ひそめけることにか、世の中に物語といふものあなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなる



(著者記日夜六十)

晝間、宵居などに、姉まゝ、母などやう阿の人々の、その物語、かの物語、光源氏佛のあるやうなど、所々語るをきくに、尼いとゞゆかしさまされど、我が思ふまゝに、そらにいかでかおぼえ語らん。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師佛をつくりて、手洗ひなどして、ひとまにみそかに入りつゝ、京にとく上せたまひて、物語の多く侍るなる、あるかぎり見せたまへ。と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らんとて、

九月三日  
治安元年(二六)

九月三日門出して、今立といふ所に移る。年ごろ遊びなれつる所を、あらはに毀ち散らして、立ちさわぎで、日の入りぎほのいとすごく霧わたりたるに、車に乗るととうち見やりたれば、ひとまには参りつゝ、額をつきし薬師佛の立ちたまへるを見捨て奉る、悲しくて、人知れず打泣かれぬ。(更科日記)

五 出 立

頃はみ冬立つはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨も絶えず、嵐にさほふ木の葉さへ涙とともに亂れ散りつゝ、事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂しとても留るべきにあらで、何となくいそぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖の雫も慰めかねたるうちにも、侍従、大夫などのあながちに打屈したるさまいと心ぐるしければ、さまゝいひこしら



へぬ。(十六夜日記)

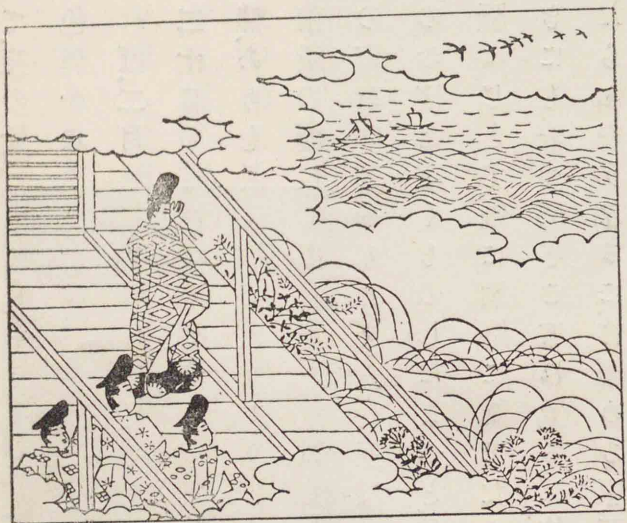
二一 須磨

尾上とら子

尾上とら子  
文學博士尾上  
八郎の妻、明  
山縣の人、治  
十三年生、行  
平  
在源氏  
關吹きこゆる  
旅人は秋涼し  
くなりにけり  
關吹きこゆる  
須磨の浦風  
(續古今集)

秋にもなれば、須磨には行平中納言の「關吹きこゆる」といひけん  
浦波いと近く聞えて、またなく哀れなり。御前の人々、皆打靜まり  
たるに、源氏の君はひとり枕を敬てて、四方の嵐を聞きたまふに、浪  
たゞこゝもとに立來るやうなり。琴を少しかきならしたまへる  
が、いと凄じうきこゆれば、人々目をさまして、涙を流しあへり。晝  
は手習をし、また様々の晝を描きすさびなどして、紛らはしたまふ。  
前裁の花いろく、咲亂れたる夕まぐれ、海見やらるゝ廊に佇みた  
まふ御様の清らなること、所がら況してこの世のものとも見えた  
まはず。白き綾のなよらかなる御衣に、紫苑色の指貫、色濃き御直  
衣して、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、經ゆるかに讀みたまふも、世に

二千里外  
白樂天の詩の  
句



須磨の光源氏

知らずめでたし。舟どもの、小さき鳥のやうにて、歌ひつゞけて漕  
ぎゆくもいと心細し。雁のつらねて鳴く聲、楫の音に紛へるを打  
眺めたまふに、自ら御涙もこぼ  
れさせたまふ。  
月いと花やかにさしいでた  
るに、今宵は十五夜なりとおぼ  
しいでて、殿上の御遊いかなら  
んとおぼしやるにも、いと悲し  
くて、月の面のみ守られたまふ。  
「二千里外故人、心」と誦したまふ  
に、御供の人々皆落涙しけり。  
年かへりて、日永く徒然なる  
に、若木の櫻ほのかに咲きそめ



て、空の景  
色麗かな  
れば、二月  
二十日の  
程、ありし  
南殿の櫻



(筆璋岳南田)磨 須

の宵おぼしやりたまふ。三位、中將、今は宰相になりたまひて、時世のおぼえ重くものしたまへど、君の御事忘れ難くて、罪に當るとも厭はじとて、俄に須磨に詣でたまふ。打見たまふより、珍しく嬉しきにも一つ涙ぞこぼれ散る。住まひたまへる處のさま、繪にかきたらんやうなるに、竹編める垣、石の橋、松の柱、龜末なるものから、めづらかにをかし。君の山がつめきて殊更に田舎びたまへるも清らなり。調度どもも假初なり。海人ども貝などもて参れるを、召

飛鳥井  
りはすべしか  
げもよしみも  
ひもさむしみ  
まくさもよし  
(神樂歌)

醉悲涙  
句白樂天の詩の



(筆泉天生荻)氏 源 光

出でて御覽ず。宰相、君、飛鳥井、少し歌ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ語りたまふに、堪へ難くおぼす。夜もすがらつゆまどろまれず、詩つくり明かしたまふ。さすがに世の聞えあれば、忙ぎ歸らんとしたまふ。御土器参りて、醉悲涙灑、春盃、裏、と諸聲に誦したまふに、御供の人々皆涙を流す。朝ぼらけの空に雁啼きて流る。主人の君、ふるさとを何れの春か行きて見ん、うらやましきは歸るかりがね。



宰相立出でんこゝちもせで、

飽かなくに雁のとこよを立ちわかれ、

花のみやこに道やまどはん。

御送りにとて御馬など奉りたまふ。歸らせたまへる御名残いとど悲しう眺め暮らしたまふ。

かくて三月にもなれば、朔日上巳の節にあたり。思ある人は禊したまふべしと、なまさかしき人の聞ゆれば、君は海面もゆかしくて出でたまふ。軟障ばかり引繞らして、陰陽師召して祓せさせたまふ。海の面うらくと和ぎわたりて、果しも分かぬに、來し方行く末おぼしつゞけられて、

やほよろづ神もあはれと思ふらん、

犯せる罪のそれとなければ、

とのたまふに、俄に風吹きいでて、空かき昏れぬ。御祓もしはてず、

人々立騒ぐ。臂笠雨いみじう降る。歸り

たまはんとするに、よろづの物吹亂されて、

またなき風なり。波いと厳しう立ちて、雷鳴り閃

尾上とら子自署

けば、海の面は光り満ちて、袞を張りたらんやうなり。落ちかゝる

心地して、辛うじて歸りたまへど、なほ止まず鳴り満ちて、雨の脚の

あたる處逸りぬべくはためき落つ。世はかくて盡きなんと人々

迷ふに、君はのどやかに經誦しておはす。

暮れぬれば、すこし鳴り止みて、風のみぞ吹く。「多く立てつる願

の力なるべし。今しばしだにあらば波にひかれて入りぬべかり

けり。かゝることはいまだ見ず」と人々いへり。曉方、皆打休みた

り。君もいさゝか寝入りたまへるに、確に見えぬもの來て、など宮

の召すに、参りたまはぬ」といふに、目覺めたまふ。「こは龍王の見入

れたるなりけり。」とおぼすに、いと心地悪しく、この住居堪へ難くな

辰上 君の良子



りたまひぬ。(源氏物語大意)

### 二二 一條天皇の御宇

梅澤和軒

同じ一條天皇の御宇でも、中の關白派時代と、御堂關白派時代とは、後宮の氣分も感じも印象も異なる。中の關白派の出である中宮は美的皇后である。曉には疾くなど急ぐ人を、葛城の神も暫し。など仰せられ、第一の人に思はれんことこそ思はぬ。など宣ひて、清少納言を待つに友人を以てせられ、才女と才女とが意氣相投じた風がある。それゆゑ、この後宮は、機才縦横で、華やかで、賑やかで、樂しさうで、面白さうである。これに反して、紫式部は極めて謙讓な婦人で、中宮に讀書を御教授申上げるのにも、忍んで人の居らぬをりをり、樂府を教へきこえあげたので、主従はさながら師弟の如く、乳母と子供の如く、随つてこの後宮の感じは、着實穩健で、陰鬱で、靜

梅澤和軒

名は精一、

澤市の人、

治四年生、

學者

一條天皇

第六十六代

中の關白

藤原道隆

御堂關白

藤原道長

中宮

名は定子

葛城の神

大和國葛城山

の一言主の神

中宮

名は彰子

樂府

漢詩の一體

かで、じみで、まじめであると思はれる。前者には頓才のある女子が多く、清少納言を筆頭として、宰相の君といひ、誰といひ、いづれも當意即妙の才女である。後者には大文豪紫式部があつて、他は皆



藤原道長(菊池容齋筆)

その光芒に覆はれ、才氣を煥發し得なかつたやうである。前者は動的で、後者は靜的、いはば男性的女性で、他は女性的らしい女性である。この男性的女性である點が、今日の新しい女達、自ら覺めたと稱する女達に喜ばれると見え、近頃は紫式部よりも、清少納言が、若い、靑韜連に歓迎される。かやうに、王朝の二大作家が、その黨派に於ても、性格に於ても、思想感情に於ても、文體に於ても、全然相反對して

靑韜連

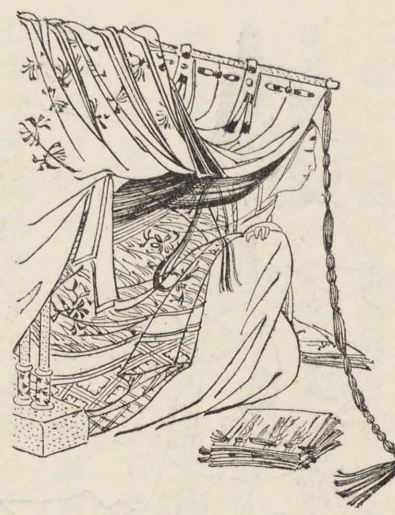
女流文學者



ゐるのは、實に千古の奇觀である。が、文壇には古今東西必ず相反對した二大作家が對峙して現れるやうである。御堂關白はその得意の絶頂にある時分に、

この世をばわが世  
とぞおもふ望月の  
かけたることも  
なしと思へば。

ある。けれども、望月は缺けるのが常である。刻一刻、白駒が隙を過ぎれば、十六夜は居待となり、はては駿馬の峻坂を下るやうに、藤原氏の權勢も天皇の勢威も俱に急轉直下しないではゐられな



(筆齋容池菊)言納少清

兼明親王  
醍醐天皇の皇  
子、永延元年  
（西暦七四七  
年）薨御。  
菟裘の邑の名、  
魯公が此に老  
隱居する意、味  
から致した故事  
に用ひる。

つた。一條天皇は優雅の君にましく、て、詞藻に秀で、また音樂にも上

達したまうた。嘗ては、君昏臣諛、無處于愬、賦云、

扶桑豈無影乎、浮雲掩而乍昏、叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗。

といふ兼明親王の子源伊陟の「菟裘賦」の跋を手書し、これを篋笥に藏して自ら戒め給ひ、或



部式紫

寒夜に御衣を脱して窮民を憫み給うたなど、よしやその御心が模倣的慈善であつたとしても、帝は到底情の君で、意の君ではなかつた。それゆゑ、寒族を微賤に抜いて他の專恣横行を鎮壓する氣概



四納言 源俊賢、藤原齊信、同公任、同行成  
 ウーランド ドイツの詩人 (1781-1833)  
 シルレル ドイツの劇詩人 (1759-1805)  
 ゲーテ ドイツの詩人 (1749-1832)  
 ヴィーランド・ヘルデル ドイツの諸文星が、ワイマール侯 (Ulhand Herder Goethe Schiller Weimar)  
 ペリクレス アテネの政治家、文物の盛極まり、ペリクレス時代を現出した (Pericles)  
 ワイマール侯 名はカール・アウグスト (1757-1828)  
 ワイマール ドイツ聯邦の首都  
 ワイマール 首都  
 ペリクレス アテネの政治家、文物の盛極まり、ペリクレス時代を現出した (Pericles)  
 馬一馬 (439)

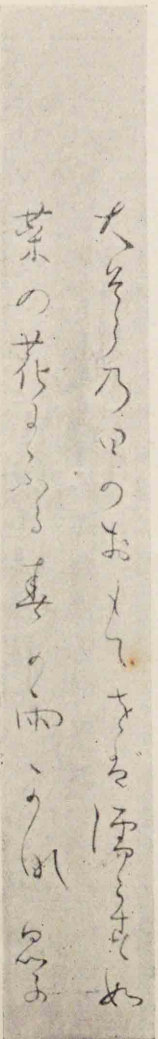
と決断とに乏しくおはしたのである。帝一日從容として宣く、朕人を得しこと延喜天曆に優る」と。げにや、當代には四納言を始として、宗教界には源信覺蓮、運超、尋禪があり、文學界には清紫の二女、赤染衛門、和泉式部、馬内侍があり、美術界にも幾多の明星があつた。ウーランド・ヘルデル、ゲーテ、シルレル等の諸文星が、ワイマール侯の周圍を巡つて燦然としてゐたのには及ばないが、それは近代のこと、古代にあつては、ペリクレスが世盛りの時でさへも、かやうな才女はなかつたのである。觀じ來れば、一條天皇の御代は永遠に誇るべき文學者の輩出した時代である。此等才女の中、清紫が代表的人物であり、其の作が聖代の代表的文學であることは、何人も異論を挿まないであらう。そして、近頃の見方でいへば、枕草子は印象文學の先驅であり、源氏物語は寫實小説の白眉であるのである。(清少納言と紫式部)

### 二三 近代女流の和歌

與謝野晶子

片側のながき溪川ゆふ月が

流す涙のこゝちこそすれ。



晶子筆蹟

茅野雅子

ゆつたりと落着きすまし赤々と

ダリヤ咲きたり雑草の中

片山廣子

鳥も鳴かず静かなる日よ我が魂の

茅野雅子 蕭々茅野儀太  
 市郎の妻、明大治  
 十三年生 治阪

片山廣子 號は松村みね  
 人、明治十一年  
 年生 治玉縣の一



久保よりえ  
醫學博士久保  
猪之吉の妻、  
愛知縣の人、  
明治十七年生

橘糸重子  
三重縣の人、  
明治六年生、  
東京音樂學校  
教授

ひとはかくて  
あるべきもて  
か二十日へて  
小あめぐみぬ  
にやけあとの庭  
武子

九條武子  
男爵九條眞致  
の妻、明治二  
十年生

かそけきひゞき空に聞ゆる。

久保よりえ

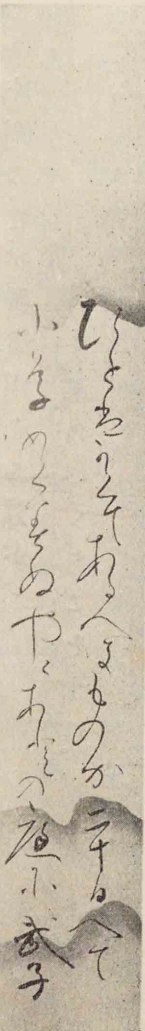
○ 朝ごとに若きいのちを削り行く

くせものなれど鏡はいとし。

橘 糸重子

○ 涙なく悔なきひとひ若しあらば、

その夕暮に死なんとぞ思ふ。



武子筆蹟

○ 思出のよすがだになき焼跡に、

九條武子

若山喜志子  
若山牧水の  
妻、長野縣の  
一人、明治二十  
一年生

吾子たちのき  
ぬのほころび  
つぎくろびに  
くろひをれば  
小夜ふけにば  
り喜志子

中原綾子  
長崎縣の人、  
明治三十一年  
生

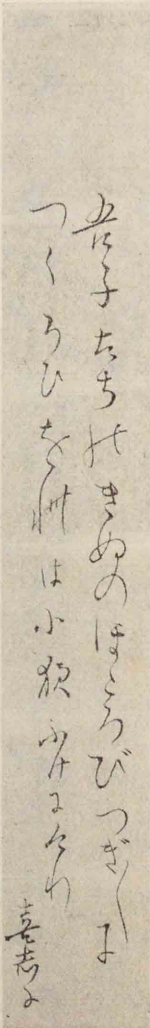
高安やす子  
醫學博士高安  
道成の妻、明  
治十六年生

○ 今立つ我はまことの我か。

若山喜志子

○ 鳥鳴けば心のどけし青物の

莖立つ頃のその鳥の聲。



喜志子筆蹟

○ 地異よりも天變よりも恐しき

人と人との魂のあらそひ。

中原綾子

○ 湧きあがる泉のごとく願はくは

高安やす子



山田邦子  
本名は今井邦子  
枝代、今井健彦の妻、  
長野縣の生、  
明治二十三年

よべ汲みしく  
花許だも水に櫻  
春ゆかむと  
邦子

坪内逍遙  
名は雄藏、名  
古屋市の生、  
安政六年、  
文學博士  
近松  
名は門左衛  
門、本名は杉  
森信盛、江門  
國の人、長門  
時代前期の浄  
瑠璃作家、享  
保九年(一八  
死、年七十二

世に生きてまし強く涼しく。

山田邦子

夜ふかくひとり目覺めてつくくと

あこが寝顔を見入りたるかも。

よべ汲みしく  
花許だも水に櫻  
春ゆかむと  
邦子

蹟筆子邦

二四 近松とシェークスピア 坪内逍遙

予曾て近松とシェークスピアとを其の位置時代境遇閱歷等の上より比べて、十餘條の相似點を得たり。曰く、其の時代の共に文藝の復興期たりし點相似たり。曰く、傳記の不分明なる點相似たり。曰く、其の世に出でしまでの閱歷相似たり。曰く、演劇未成熟

シェークスピア  
英國の戯曲作  
者、  
一六一〇

洗然順所  
適スル  
逍遙人

洗然順所  
逍遙人

蹟筆 逍遙 内坪

時代に出でて大成者たる點相似たり。曰く、當時行はれつゝありし諸先驅の長所一切を攝取せし點相似たり。曰く、翻案または改作添作若しくは合作を嫌はざりし點相似たり。曰く、劇の原始時代に出でて、爲に益し爲に損したる點相似たり。曰く、諸座に關係して諸種の脚本に變化自在の技を揮ひし點相似たり。曰く、好協力者を得たりし點相似たり。曰く、競争者の侮るべからざる者ありし點相似たり。曰く、當時既に其の作を刊行せしのみか、種々に版を重ねたりし點相似たり。曰く、當代にも無雙の作家として歓迎せられ、後世に至りては更に一段の推重を受けたる點相似たり。曰く、時勢の推移と共に軌近反





動の起らんとしつゝある點も相似たり。曰く、虚と實と相半ばなるの境に立脚して、不易の實世相を髣髴せしむると同時に、理窟若しくは教訓を與ふるといふよりも、寧ろ一種の慰藉を供することをして其の藝術の目的となせるらしき點も相似たり。曰く、詩人には稀有なる豊富の常識を具へて、穩和健全の人生觀・倫理觀に安住せし點も相似たり。曰く、其の修辭術の縦横無碍にして、悲哀と滑稽と兼ね到り、詞藻の富贍なる點も相似たりと。

されど、此の如きは或は偶然の類似たるに外ならざるべし。今改めて之を作者たるの稟賦と才能に就いて見るに、二家の間には、一段と意味深き相似點あるものの如し。

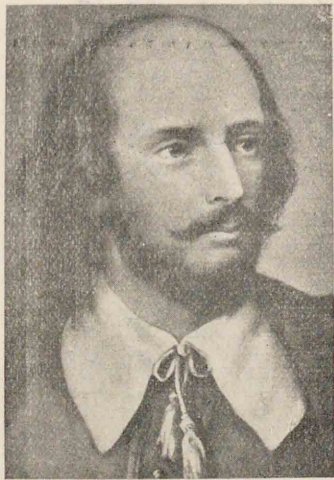
古今内外を問はず、作家の賦性には本來二大區別あるかと思ふ。先づ作するに當りて想と筆と同時に働く作家あり。脚色も人物も對話も詞藻も湧くが如くにして咄嗟の間に成る。自らも其の如何にして然るかを知らざるもの如し。時としては筆のかた想よりも先に働かししにやと疑はるゝ場合なきにあらず。之を半無意識にして作すと謂ふ。譬へて言へば、骨と肉と皮膚と服飾とが一時に立地に製せらるゝに似たり。シェークスピアの如きは其の最も大いなる代表なり。然るに、之とは幾ど反對に、作の骨組の十分に整ひたる後までも肉は尙備はらず、皮膚の未だ布き及ばざる部分あり、服飾は勿論なり。即ち其の想の悉く具體化せらる



イブセン  
ノルウェーの  
劇作家・詩人  
D 1828—1906

るまでには、一年、時としては二三年を要することも稀ならず。此の如きは十九世紀以來の名家に多し。徹頭徹尾自ら意識したる著作振なり。イブセンの如きを其の著しき適例とす。  
半無意識の作家は必ずの如くに健筆なり、一氣呵成なり。千篇立地に成るの概あり。随つて出来不出来あり、杜撰・蕪雜・支離・無稽の失あり、翻案・改作に過ぎざる作あり、時としては更に一段名譽ならざる評判を蒙る場合さへ尠しとせず。脚色にも前後辻褃の合はぬことあり、不自然を極めたる性格あり、不條理千万の事件あり、片腹痛き悪文あり、鄙陋至極の文句あり、駄洒落あり、無くては聊か差支へぬ筋や人物や詞句が幾らもあり。其の傑作にさへもムダやソツやアラやキズの無きことはなし。脚本は一小宇宙にして有機體に比すべきものなどと評することもあれど、此の種の作家のは必ずしも然らず。其の最大代表者たるシェークスピアのす

孟嘗君  
本名は田文、  
支那周代齊の  
相、食客三千  
人を養つてゐ  
た。(C. 370 B.C.)



ヤビスクーエシ

らが大部分のムダ附にて、現に一幕幾場かを切取つてしまひても、作の生命が絶ゆるでもなし。「ハムレット」や「オセロ」さへもさうなり。恣に枝を繁らせたる老銀杏樹の如く、然らざれば、來る者は拒まず去る者は追はざる孟嘗君式の家庭組織などに比すべし。

これに對して、全意識に成れる近代の名作は、截然たる別天地なり。例へば、イブセンの作などには幾ど秋毫もムダといふものなし。目立たぬやうに手を入れたる數寄屋好みの樹木などに比すべし。ふと見れば自然の儘の如くなれど、よくよく見れば、一齣一段は言ふに及ばず、一句一字の末までも、作家の周到明確なる自意識の奥書を経たるものにあらざるはなし。手抜け不用意勸違へ。



見落しなどいふ意味の瑕疵は絶えてあらずといふも可なり。隅から隅までキチリンシヤンと行届きて、些のスキもなく些のタルミもなく些のアソビもなきを此の類の作の特質とす。

ゆとりゆとりに富める前類の作と、引締まりたる後類の作と、其の佳なるものに至りては必ずしも優劣なし。只前者の傑出せるものを讀む時は、其の形式や内容に不自然の個所夥しきに係らず、案外にも心を山野河海の間に遊ばせつゝあるが如くに感じ、後者の秀でたるを讀みては、其の話も其の事も其の人物も如何にも實際らしく感じながら、不思議にも狭き一室に靜坐して人生の疑問を沈思せしめらるゝが如くに感ず。後者は人生を觀照して自我を深うするに宜しく、前者は忘我し遊神して天地と同化するに宜し。

此の作癖の相違は主として作家が稟賦の然らしむる所たるに外ならずと雖も、年毎に自意識の強烈ならんとする現代に於ては、

公 ヴェニス公爵  
アントニオ  
人 俠氣ある大商  
友 友人ハック  
に、シヤイロツ  
クから、肉一  
斤を抵當とし  
りて三千兩を借  
り過ぎても返限  
命を過ぎても返  
出立つたのが法  
延に立つたの

前者に屬せしむべき大いなる作家を看出すことは次第に稀有になり行くべし。シエークスピアに比すべき近松は、此の點より觀て趣味深き研究の對象なりといふべきなり。〔近松傑作全集の序論に據る〕

自修文

二五 ヴェニスの商人

公いかにアントニオはあるか。さて、其方は氣の毒な者ぢや。相手方のシヤイロツクは頑石同然の人でなし、慈悲憐愍れんびんの心とては微塵みじんほどもない奴なれば、さぞ心を苦しめることであらう。アントニオ承りますれば、上には御心に掛けさせられ、段々相手方をお諭し下されましたげに御座りますれど、飽くまで執念深く申し張ります上からは、所詮免れ難い國法の表おもて、この上は觀念仕りました



て、心靜に彼が邪慳しやけんの犠牲と相成りまする覺悟に御座りまする。  
公誰ぞある、シャイロツクを呼入れい。(シャイロツク登場) 公、シャ  
イロツク、世上のものも思ひ、予もまたさやう存じ居ることぢやが、



何と、そちがこの度の訴訟  
は、よも本心ではあるまい。  
事落着の間際と相成り、俄  
に打つて變り、慈悲を施し、  
今責めるこの商人の肉一  
斤は申すも更なり、元金の  
大半をも免除なし、重ね重  
ねの案外に世人を驚かさ  
う所存であらうな。近頃引續いて彼が身に降りかゝつた不慮の  
損亡、さすがの大商人であるけれども、進退谷まきまる爲體てんたい、よしや心鐵

石の如き殘忍無慈悲を習慣のトルコトルコ鞆だつたんの夷えびすでも、何條憫みを抱  
かないであらう。これや、シャイロツク情ある返答を聞きたいも  
のぢやの。シャイロツク手前の存じ寄り先達申上げて置きました。  
天帝に誓うた上は、證文通りには是非受取らねばなりません。それ  
をならぬと仰りますれば、御政道は暗闇くらやみ、ヴェニスVeniceの國法は無ないも  
同然で御座ります。かやう申したなら、なぜ三千兩といふ金は  
取らないで、役にも立たぬ人肉をたつた一斤やそこら取るのかと、  
御不審も御座りませう。その御返事は致しませぬが、言はば手前  
の好勝手と申したらどうで御座ります。譬へば、鼠めがあばれ  
て困る、それが憎さに、若し鼠を殺してくれたら、報に一万兩やらう  
といふも好勝手。何とそんなものでは御座りませぬか。世間に  
は、豕を見れば胸がむかつき、猫を見れば氣が狂ふといふ人もある。  
それもこれも銘々の持前。とかく好すき不ずき好は人の心の操糸あつりいと、百八煩ひやくはちわづら



バッサニオの友人、金を懐にしてウエニオに急行し、それを救はうとする

惱の元締。何で豕が氣に喰はぬ、何で猫が嫌だと問はれても、理は言はれぬ。虫の好かねえアントニオ、三千兩の抵當に肉一斤、てんで柀に合はぬ取引も、深い怨があるによつて意趣返しがしたいばつかり、外に仔細は御座りませぬ。何とお聞分け下されましたか。バッサニオ、餘りといへば人情知らず。そのやうなことが、残忍非道なこの御訴訟の申し開きになると思ふか。シキ、お前さんの氣に入るやうな返事をする義務はない。バ、好かぬからとて殺すといふは人情ではないわい。シキ、憎むほどなら殺したいと思ふのが人情の當り前だ。バ、氣に喰はぬと憎いとは同じではないぞよ。シキ、何だと。お前さんは蝮に二度咬ませる氣か。アン、あ、これ、相手にこそよれ、問答無益。ヂユウに道理を言聞かせるは、親羊を鳴かせる狼になぜ子羊を取つたと詰り、峯の松風磯打つ浪に音を立てるなと諭すも同然。凡そ世の中に頑なもの、ヂユウの心に越えるはな

い。もう、何も言うて下されませう。この上は片時も早うお裁き受け、彼がなすまゝになりませう。

バ、これや、シャイロツク、三千兩をこれこの通り、六千兩にもして返すのぢやわい。シキ、六千兩が六万兩でも、いやさ六千万兩でも、取る氣はない。證文通りが望だ。シキ、さばかり他に辛うして、その身に咎のくだる時、如何にして慈悲を求めうとするぞ。シキ、曲つた事をせぬ者が、どんな咎を憚りませうぞい。近い例が、お前様方のお邸で飼うて御座る大勢の奴隸衆、金の威光とお主の威光で、牛馬同様にこき使う



クッロイヤシ



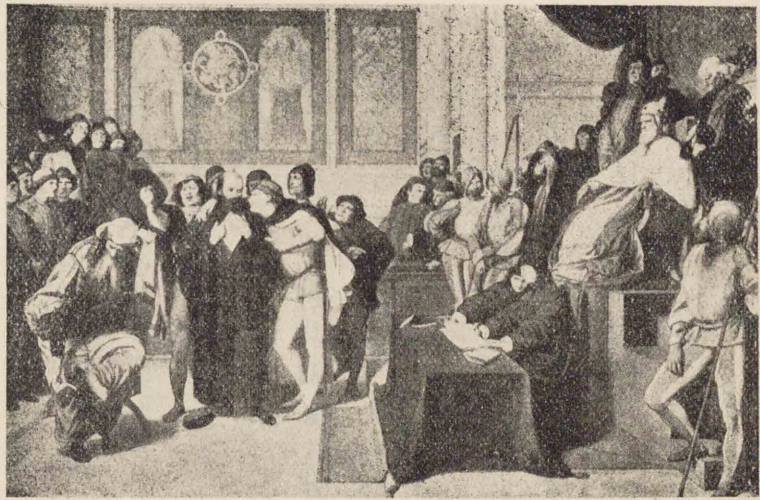
ベラリオ  
法學博士

て御座らつしやるを、何と引上げてお婿様になされませ。なぜあのやうな痛はしい酷い仕事をおさせなされます。御前様と同じやうに、柔い寢臺に寝せて、なぜ旨い物を喰べさせはなさらぬのだ。」と申したなら、『あれは奴隸だ、買取つたものゆゑ俺のまゝだ。』と、さ、仰るで御座りませう。まづその通り、あの男の肉一斤は大金出して買つた代物。わしの物だからわしが取るのだ。それをならぬと仰れば、ヴェニスベニスの國法は反古ほんこ同然。御政道が立ちますまいぞよ。御裁判下されませうや、如何に御座りまする。』公き予が國主たるの威權を以て、法廷を閉ぢるも心任せぢや。なれども、豫ねてこの訴訟は、世に聞えたベラリオ博士を相招き、取裁かせるべき手筈であるから、程なくこれへ出頭なさう。』

(この時、博士の書狀を携へたる者來れりと報ず。)(バッサニオの妻ポーション、ベラリオ博士の代理者バルサザーと稱し、法學博士の服装にて登場。バルササール)

公き老博士の許から參られたか。』ポーションさやうに御座りまする。公きよくこそ參られたれ。先づ席に着かせられよ。さて、其許には只今これで取調中の訴訟の始終を御存じであるか。』ボ委細承知致し居りまする。この中何れが當の商人で、何れがヂェウで御座りますな。』公きアントニオ。シャイロツク。兩人ともに前へ出い。』ボシャイロツクと申すは其方か。』シヤシャイロツクは手前で御座りまする。』ボさて、其方が今度の訴訟は奇怪至極の訴ぢやのとはいへ、手續に邪がないから、ヴェニスベニスの國法の表として、これを斥けるべき道理はない。これや、アントニオ、そちが一命は訴訟人シャイロツクが心のまゝとな。』アさやうに申し居りまする。』ボ證文の面は毛頭も相違ないか。』ア相違御座りませぬ。』ボ然る上は、シャイロツクに於て情をかけねばなるまいぞよ。』シヤとはまたどういふ據よない仔細が御座りまして。譯をお聞かせ下さりませ。』





場 の 廷 法 人 商 の ス ニ エ ヴ

ボ、あゝいや、情は強ひるべきものではない。春の小雨の音なき如く、自然に降つて人を潤す。その徳澤は二重で、受ける者にも幸があれは、授ける者もまた幸である。畢竟人君の偉徳で、衆徳の集る所ぢや。この徳、王者の胸に宿れば、光、寶冠に百倍する。笏は人の世の威力を示して、目に見える尊嚴の飾となるけれども、慈悲の徳はこれに彌増し、天の御神のおほん徳、慈悲を以て義理を柔げ、情を以て法度の備はらぬのを補うてこ

そ、王道は始めて天道に叶ふの道理ぢや。ぢやによつてシャイロツク、其方の申條は義理には悖らず、掟には協うたれども、この道理をよう思へ。若したゞ一途に義理を責め、政道の表だけを強ひてたて抜かうとする時は、罪業深い人の身の、誰かはこの世に救を得よう。明暮神に慈悲を祈るは、取りも直さず餘の人に慈悲をかけたよの誨ではないか。かうまで言葉を費すのも、義理一片の訴を宥めうと思へばこそ。承引せねば是非に及ばず、のつびきならぬ掟の表、それなる商人をば重い罪科に處せねばならぬ。シャ、手前の所爲が曲事なら、どんなお罰でも受けませう。御法通り證文通り、償をお渡し下さりませ。ボ、アントニオは金子を拂ふことは相協はぬのか。ボ、あゝいや、その金子はまづこの通り、彼に代り、手前から支拂ひまするで御座ります。はい、元金の倍額に御座ります。若しこれでも不足と申せば、手前の手なり首なり心臓なり抵當に



俑を作る  
悪例を始める

ダニエル  
ヘブリユの  
裁判の神

致しましても、十倍にして支拂ひます。なほこれでも承引せねば、訴訟沙汰は表向で、實は人を陥れて殺さう底意と存じますれば、何卒お上の御威光で、大義公道のため、聊か法を曲げさせられ、この人鬼めを御取押へ下されませう、お願い申し上げます。」ボ、あゝいや、その儀は相成らぬ。ヴェニス國は廣いといつても、いかなる權威を以てしても、掟を曲げる力はないぞ。一たび俑を作る時は、百の過がこれに倣ひ、長く國家の禍根とならう。その儀は固く相成らぬぞ。」<sup>Daniel</sup>ダニエル様の再來、取りも直さずダニエル様。お若いに似ぬ明判官様。恐入つた御發明。」

ボ、どうかその證文を見せてください。シャ、これに御座りまする、憚りながら、これに御座りまする。」ボ、シャイロツク、何とこの金額を二倍にして返濟しようとして居るではないか。シャ、誓うた上は、誓うた上は、天帝に誓うた上は、おのが魂に背かれませうかい。ヴ

ニス一國と取換つこにしてみやで御座る。」ボ、はて、この證文は期限が已に切れたから、國法の表によれば、それなる商人の胸元から肉一斤を切取ること、それなるヂユウが心のまゝ……これやシャイロツク、情をかけよ。三倍の金子を受取り、身共にこの證文を裂かしてくれい。」シャ、證文通りの支拂が濟んだ後なら、お心任せになさりませ。……お見受け申した所、御立派な判官様、法や掟もよう御存じ、御理會も道理千万。御國法の黒柱とも存じますから、その御國法を楯にお願ひ申します。早う裁判して下さいませ。心にかうと誓うた上は、人間の舌の力ぢやあ、この心は動かされぬ。證文通りのお裁きをお願い申し上げます。」ア、私からも申し上げます。何卒お取裁き下されませう、お願い申し上げます。」

ボ、この上は是非もない。襟を開き、刃を受ける用意致せ。」シャ、さしてさて天晴な判官様。年に似合はぬ偉いお方ぢや。」ボ、この證文



に見えた償は、正しく國法の旨意に協うて、異議を挿むべきものでない。」「シャ、御意の通り、御意の通り。さて、發明な、依怙、最眞のな  
い判官様。見掛は若うても、分別は老人も及ばぬ。さて偉いお方  
様ぢや。」「ボ、この上は胸を露はす仕度致せ。」「シャ、はい。胸で御  
座る。證文にさやう認めて御座ります。……『すぐ胸元から』と御  
座りませうがな。」「ボ、いかにも……肉を量る秤はあるか。」「シャ、はい  
はい。」「ボ、シャイロツク、其方自辨で、外科醫者を呼寄せおけ、傷口を  
止めぬ時は、命を失ふかも圖られねば。」「シャ、さやうなことが證文に  
認めて御座りまするか。」「ボ、いや、認めてはないけれども、さばかり  
の情をかけるは當然ぢやわい。」「シャ、手前は會得致しませぬ。證文  
に書いて御座りませぬ。」「

ボ、商人、何も申すことはないか。」「ア、疾くから覺悟致し居ります  
れば、改めて申すほどのことも御座りませぬ。」「シャ、何のかのときが

經つ。御宣告を願ひまする。」「ボ、これなる商人アントニオの肉一  
斤は其方の物ぢや。法廷これを許し、國法これを與へるぞ。」「シャ、さ  
つても公平な明判官様。」「ボ、この上は其方是非自ら手を下して、彼  
の胸元から肉一斤を切取れ。國法これを認め、法廷これを許すぞ。」「  
シャ、さつても博學な判官様だ。……御宣告だ。覺悟しろ。」「

ボ、待て、暫く、今一言申すことがある。これこの證文には、血汐は  
只の一滴でも、其方に遣はすと書いてはないぞ。肉一斤と明白に  
書いた上は、證文通り肉一斤を取るのたまゝ……なれども、切取る  
そのはずみに、基督信者の鮮血を一滴でも灑ぐに於ては、地所も家  
財も悉く、ヴェニスヴェニスの國法によつて、ヴェニスヴェニスの國庫に沒收致すぞ。」「  
グラシャノ、依怙、最眞のない判官様。どうだ、ヂユウ。さて博學な判官  
様だ。」「シャ、それが掟で御座りまするか。」「ボ、疑ふなら自ら調べて見  
よ。強ひて條文を楯となし、偏に嚴罰は課せうとする故、己に出づ

グラシャノ  
Crastiano,  
アントニオの  
友人



るもの己に返り、其方が望む以上の嚴重な裁きも致さにやならぬ。」  
グ「なるほど博學な判官様。 どうだ、デユウ。 なるほど博學な判官  
様だ。」 シャ「それぢやあ先方の望どほり、證文の三倍で其奴を許して  
やりまする。」 ベ「その金は即ち此處に。」 ボ「控へい。 デユウには飽  
くまで掟通り、國法通りに裁き遣はす。 急ぐには及ばぬ、控へて居  
れ。…… やい、デユウ、科料の外は何物でも取立てることは罷成らぬ  
ぞ。」 グ「どうだ、デユウ。 なるほど公平な判官様。 なるほど博學な  
判官様だ。」 ボ「いざさらば、肉を切取る準備を致せ。 但し血を流す  
ことは罷成らぬ。 まつた胸の肉一斤の外を切取るとは相成ら  
ぬぞ。 若し聊かでも分量相違いたすに於ては、よしや分釐ぶんりんの輕重  
でも、いやさ、髮の毛一筋の相違でも秤皿の上に生ずるに於ては、其  
方の命はないぞ。 そちが家財は悉くヴェニスヴェニスの國庫に没收致す  
ぞ。」 グ「今ダニエル様。 今ダニエル様。 どうだ、もうかうなつちや

あ、ぐうの音も出やあしまい。 ざまあ見ろ。」

ボ「何とてデユウは躊躇致すぞ。 償を取らぬか。」 シャ「元金だけを  
取つて、お暇が戴きたう御座りまする。」 ベ「疾くから準備を致して  
居る。 即ちこれに。」 ボ「あゝいや、場所にこそよれ、法廷で一旦受取  
らぬと申したうへは、彼には飽くまでも掟通り證文通りの償だけ  
を受取らせい。」 グ「ダニエル様。 も一つおまけにダニエル様。 お  
いデユウ、とんだ好い言葉を教へてくれた、禮をいふぞよ。」 シャ「すれ  
や元金だけでも受取ることが出来ませぬか。」 ボ「償の外は一切相  
協はぬ。 命がけで切取るか、どうぢや。」 シャ「ちえ、この上はどうと  
も勝手にしやがれ。 もう論判は無駄なこつた。」 ボ「待て、シャイロ  
ック。 まだ其方には御用がある。 自儘の退席は罷成らぬぞ。……  
ヴェニスの國法によれば、直接にもあれ、間接にもあれ、若し外國人  
で當ヴェニスの國人を殺害なさうと企てたことが露見に及べば、



その財産を二つに分け、當の相手はその半ばを取り、半ばは國庫に没收なし、なほ犯人の一命は偏に公爵の仁恕に任せ、何人でもこの儀について異議を挿むを得ない定め。其方が罪狀は正しくこれである。直接にもまた間接にも、これなる商人が生命を奪はうと



法延を逃出するイロクロ

したことは明白であるから、その罪は免れることが出来ぬ。この上は地にひれ伏して、公爵のお慈悲をお願ひ申せ。」

公此方の心の汝等と異なるのを知らせるため、願を聞くまでもなく、其方が一命は赦し遣はす。さて財産の一半はアントニオに取らせ、残る一半は當國庫に没收しよう。但し悔悟の實が見えたら、科料ばかりで差許さ

う。」ボ「それは國庫に對する分、アントニオへは制限の通り。」シャ「いや、赦免は望で御座らぬ。命も何もかも取上げて下さりませ。大黒柱を抜かれるのは、家を取られるも同じこと、暮らし元手の財産を取上げるぐらゐなら、命を取つて下さりませ。」

ボ「アントニオ情をかけて遣はす氣かどうぢや。」ア「憚りながら、公爵様始め御列席の方々へ申し上げます。シャイロツクが財産一半を科料で御免除あるやう、只管願ひ奉ります。また残る一半は、私當分の間預り置き、豫ねてシャイロツクの娘と結婚致して居る紳士に相渡したう御座ります。なほこの上に二個條のお願、……第一シャイロツク事、かう御仁惠を蒙りました上は、只今から基督信者と相成りますやう。第二には、死後の一切の財産を件の娘夫婦に譲るといふ證書をこれで認めますやう、何卒御申付け下されたう願ひ申し上げます。」公「いづれも履行致せ。若



し相背くに於ては、免除の儀は相協はぬぞ。ボシヤイロツク、異存はないか。 どうぢや。シヤ異存御座りませぬ。ボ書記役、財産讓渡の證文を認めい。シヤ何卒お暇を下し置かれませう。 氣分が勝れませねば、證文は後からお送り下され、宅で調印仕りまする。公退席は差許すが、申付けたことを違へまいぞよ。(シエークスピヤ原作)

二六 出世景清

近松門左衛門

右大將頼朝公、南都の大佛御再興まし、既に成就と訴ふれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人、京鎌倉の牢を開き、残らず御免なされける、中にも悪七兵衛景清は、大事の朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郎に仰付けられ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり、大佛供養御聽聞あるべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける、路次の行列花やかなり。

景清  
平氏、平家の  
侍大將  
佐々木  
名は高綱

巨椋堤  
山城國宇治の  
ほとりに巨椋  
池がある、そ  
の堤をいふ  
畠山重忠  
通稱は秩父庄  
司

既に我が君巨椋堤おぐらづつみに差掛り給ふ時、畠山の重忠息をばかりに馳來り、御馬の前に跪き、扱も悪七兵衛景清は、御成敗の由承り候へども、未だ恙なく牢の内に罷在候。 一大事の囚人なれば、早速首を刎ねられ然るべく候はん」と、謹んで申上ぐる。 頼朝公聞召し、不思議のことを申すものかな。 景清は佐々木の四郎に申付け、一昨日の暮程に首打たせ、即ち其の首頼朝が見参して、獄門にかけさせしが、僻事なるか」と仰せける。 重忠重ねて、其の段は存ぜず候へども、重忠は今朝景清が生顔を慥に見て参り候」と言ひも果てぬに、佐々木の四郎つゝと出で、いやこれ畠山殿筋なきことな申されそ。 其の景清は某仰を承り、高綱が手にかけて首を刎ね、我が君の實檢にそなへ、三條畷に獄門にかけて候ものを、景清が二人あるべきか。 近頃粗忽千万」と、嘲笑つて申さる。 重忠聞き給ひ、尤も、御分が手にもかけつらめ、又重忠も慥に見て候は如何に。 高綱色を違へ、は



て埒もないこと、一度斬つたる景清が蘇るべきやうもなし。それは定めて血迷うて何がな見つらん。但しは寢惚けて夢をば見給ふか。「いやさ、御分がうるたへて、由なき者を景清と思ひ斬つたるか。」夢を見たるか。「あわてたるか。」これ目を覺まして思案せよ。

近松門左衛門杉森信盛

号平安堂集林子

善提名

阿耨院穆矣日一具足居士

近松門左衛門善提

と、氣色かはつて争ひける。頼朝公だん／＼聞召し、いかさま、佐々木、畠山、粗忽あるべき人にてなし。不思議千万晴れやらず。いで

是より取つて返し、頼朝直に見分くべし。おの／＼静まれ／＼と、御馬の鼻を立直し、都に歸らせ給ひける。

さる程に、三條の畷に景清の首を斬りかけ、平家の一族謀反の頭領、悪七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝公立寄り御覽あり、

近松門左衛門杉森信盛  
平安堂集林子  
善提名  
阿耨院穆矣日  
一具足居士

歴劫不思議  
法華經普門品  
第二十五に、  
「弘誓深如海、  
歴劫不思議、  
とある、万劫  
を経て、万劫  
がたい不思議  
の意

高綱・重忠を招き、「これ見られよ」と仰せける。重忠なほ不審晴れず、諸大名立ちかゝり、よく／＼見れば、今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫々として、千手観音の御首と變じ給ひける。歴劫不思議ぞ有難き。しかつし所へ、清水寺の大衆達、我も／＼と馳參じ、扱も一昨日の夜中に、佛前の蔀おの／＼開きて候ゆる、若し盗人の業にやと、御戸を開きて候へば、観音の御首切れて失せさせ給ひ、切口より血流れて、禮盤・長床・朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候ゆる、驚き入つて御注進申上候。と、事の次第を申上ぐれば、君を始め奉り、重忠も高綱も、供奉の上下おしなべて、あつと感ずるばかりなり。君信心の感涙を流させ給ひ、誠や、景清年来清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より三十七の今日まで、毎日三十三卷の普門品を、讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが、疑もなく觀世音、兵衛が命に代らせ給ふ有難さよ。と、御手を合させ給ひければ、僧俗、男女下



下まで、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬ者もなし。重ねての御説には、かくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一万座の護摩を焚かせ、御首を繼ぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せん」と、御身を淨め、佛の御首を直垂の袖に請入れて、清水寺への御參詣、ためし稀にぞ聞えける。

枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ぞ有難き。かくて頼朝公御法事も事終り、佛の御首を繼ぎ參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木・畠山・景清夫婦を伴ひ、御前に出でらる。頼朝公御覽じ、珍しや景清、我を平家の敵として狙ひ討つべき志、神妙々々。尤も武士の憤げにさうもあるべけれ。然れば、頼朝が爲には御邊また敵なれば、討つて捨つべきものなれども、汝が身には觀世音入替りましますゆゑ、二たび誅せば觀音の御首を二たび打つ道理、勿體なし。勿體なし。若し又頼朝運盡きて、御邊に討たる、ものならば、觀世

枯れたる佛の願より、千手の誓ぞたのもしき、枯れたる草木もたちまらに、花咲きたれば云々(古今著聞集)

いで其の頃、以下の物語は、謡曲景清の文句そのまゝを引用したのである。平氏、教盛の子、壽永四年(一一八三)二月二十六日、

音の御手にかゝると思ふべし。此の上は助け置き、日向國宮崎の庄を宛行ふ」と、御懇情の御言葉に、御判を添へてぞ賜はりける。景清涙を留めかね、誠に身に餘りたる御誕の段、生々世々に有難く、魂に徹つて覺え候。かく情ある我が君と知らず、狙ひ申せし景清が、所存の程こそ悔しけれ」と、御前をも打忘れ、聲を揚げてぞ泣きわたる。さて御土器賜はり、諸國の大名残りなく、皆々盃さし給ふ。重忠仰せけるは、かゝる目出たき折といひ、かつうは我が君の御慰みのため、和殿八島にて功名の様子語りて聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ、平に〜とありければ、頼朝公を始め參らせ、滿座の人々一同に、早とく〜とこそ望まれる。景清辭するに及ばねば、袴の裾を高く取り、御前に色代し、過ぎし昔をぞ語りける。いで其の頃は、壽永四年、二月中旬のことなりしに、平家は船、源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。能登守教經



宣ふやう、『去年播磨の室山備中の水島、鴨越に至るまで、一度も味方の利なかりしこと、偏に義経が謀いみじきによつてなり。』いかにもして九郎を討ちとる謀略こそあらまほしけれ。』と宣へば、景清心に思ふやう、判官なればとて、鬼神にてもあらばこそ。命を捨てば易かりなんと、教経に最後の暇乞ひ、陸に上れば源氏の兵、あますまじとぞ駈向ふ。景清これを見て、もの／＼しやと夕日影に、打物ひらめかいて切つてかゝれば、こらへずして刃向ひたる兵は、四方へはつとぞ逃げにける。さもしや方々よ、源平互に見る目も恥かし。一人をとめんことは、案の打物小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清よと名乗りかけ、手取にせんとて追うて行く。三保の谷が着たりける兜の鍔を取りはづし、二、三度逃延びたれども、思ふ敵なれば逃さじと、飛びかゝり兜を押つ取り、えいやと引く程に、鍔は切れてこなたに留れば、主は先へ逃延びぬ。遙

三保の谷  
十郎國俊

に隔てて立歸り、『さるにても汝恐しや、腕の強さ。』と言ひければ、景清は『三保の谷が首の骨こそ強けれ。』と笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語、恥かしう候。』と語り給へば、人々は一度にどつとぞ感じける。

かくて我が君御座を立たせ給ひければ、大名小名續いて座をぞ立ち給ふ。景清君の御後姿をつく／＼と見て、腰の刀をすると抜き、一文字に飛びかゝる。おの／＼これはと氣色を變へ、太刀の柄に手を掛くれば、景清退つて太刀を捨て、五體を抛ち涙を流し、ハア南無三寶淺まじや。いづれも聞いて給はれ、かく有難き御恩賞を受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨の一念、御姿を見申せば、主君の敵なるものと、當座の御恩ははや忘れ、尾籠の振舞面目なや、眞平御免を蒙らん。誠に人の習にて、心に任せぬ人心、今より後も我と我が身をいさむとも、君を拜む度ごとによも此の所存



は止み申さず、却つて仇とやなり申さん。とかく此の兩眼のある  
 ゆゑなれば、今より君を見ぬやうに。」と言ひもあへず差添抜き、兩の  
 眼玉を抉り出し、御前に差上げて、頭をうなだれむたりけり。頼朝  
 甚だ御感あり、前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝  
 が恩をも忘れず、末世に忠を盡すべき、仁義の勇士、武士の手本は景  
 清。」と、數の御褒美淺からず、鎌倉さして入り給へば、なほ景清は觀音  
 に、三万三千三百卷の普門品を讀誦して、日向國を本領し、悦び々  
 退出す。なほく源氏の御繁昌、國靜謐の始なるはと、皆万歳をぞ  
 唱へける。

二七 忘 我

姉崎 正治

Franklin  
 フランクリンであつたか、かういふことをいつて居る。「一つの  
 針を持つて、その尖を十五分じつと見詰めて、その間他の事を考へ

姉崎正治  
 號は朝風、  
 都市の人、  
 治七年生、  
 博士、東京  
 國大學教授  
 フランクリン  
 米國の政治  
 家、哲學者、  
 外交家、著述家  
 (1706-1790)

ずに居ることの出来る人は天下の豪傑である。」と。それと對にな  
 る譬が佛教にある。鰐と狐と猿と犬と鳥ともう一つは蛇、これを  
 一つの綱で繋ぐ。すると、鰐はもとの淵へ歸りたがり、蛇は叢の中  
 へもぐりたがり、犬も猿も狐も鳥もそれ々々自分の故郷と思ふ處  
 へ歸らうとして、あちらへ行き、こちらへ往きする。啻に他の動物  
 の上ばかりではない、我々の心もまたやはり始終これをやつて居  
 るのである。

この譬喩は我々に我が心を落着けねばならないといふことを  
 教へる。文明が進むと色々の動搖が起る、刺戟が多くなる。我が  
 心が風船球の如く風のまにまにふらふらと動きたがる。これを  
 落着ける工夫は、東洋にも西洋にも、宗教にも、道徳にも、數千年來段  
 段試して來たものがある。東洋殊に日本文明の一つの特色は落  
 着きといふことで、大事にも、小事にも、文にも、武にも、これが大切な



ことになつて居る。この落着きを得るのには、先づ外界から来る刺戟に動じないことが必要である。蛇や鱈があちらこちらへ往かうとするやうに、我といふ意識が、時により、人により、常に動搖して居つてはならぬ。金と我をアイデンティファイするものもあらう。情慾に動かされては、獸性の我になつて居るものもあらう。つまり虚榮名譽驕慢などで動いて居る我は我でなく、他の爲に存在して居るのであらう。

我の我たる所以を識り、眞の我に歸るには、かやうな小さな我、假の我を忘れねばならぬ。我を忘れるといふのは寧ろ消極的方面で、その第一着は或種の麻醉的方法を用ひるのである。宗教の儀式で香氣を用ひるのもこれで、<sup>Delphi</sup>デルフィの神託は硫黄の蒸氣で心を恍惚とさせて神の告を受けた。佛教で經文を唱へる調子もや

デルフィ  
ギリシャの古  
市、アポロ神  
を祭る神殿が  
あつた

はりこれで、調子に變化がないと、心が自然その方へ吸収されてしまふのである。

機械的でなく、もう少ししつかりした方法は坐禪で、靜坐が一番初歩に出て来る。そのためには呼吸を制御する。これが身體を保ち、心を支配する上に非常に必要なことである。更に下腹に力を入れる、所謂臍下丹田の法である。そして、書物を朗讀する。これらは心を平調にする有力な方法である。

また心をこめて字を寫す。これは印度でも西洋でも古くからやつて來たことで、寫經の功德として推奨されて居る。王陽明は、「書を讀んで倦まば、更に之を寫すべし。」といつて居るが、心を落着けるためにも、寫字は大切なことである。

これを今少し積極的にするならば、つまり神さまを仰いでこれに歸依するのである。神さまが遠過ぎるなら、近く守本尊を置く

王陽明  
名は守仁、支  
那時代の儒  
者 (1492-  
1528)



レイトン  
英國の歴史畫家・彫刻家  
(1830-1880)  
パーシファル  
十二世紀頃の起つた傳説の英雄

ゲッセマネ  
キリストが最後の晩餐を弟子とすまして後祈をした園、エルサレムの東にあつた  
井伊大老  
掃部頭直弼、彦根藩主、徳川幕府の大老、万延元年(一八六〇)四月十六日歿

がよい。頼朝が石橋山で敗れて落ちる時、守本尊の觀音を有して居つた。これは散亂して居る我を中心に盛返す方法である。佛敎の數珠やキリスト敎の十字架も同じ譯である。レイトンの畫であつたか、パーシファルが誘惑に打克たうとする時に、その劍の尖の十字架をじつと見詰めて、そこに踏止まつて居る畫があつた。あれが守本尊によつて發する心持である。武士でいへば兩刀、婆羅門敎では聖繩、みなこれである。

守本尊は外物であるが、これを内心で行ふのは精神集中で、宗教の言葉でいへば祈の情である。祈の最も純潔高尙なものは、キリストがゲッセマネの園で捧げた父よ、汝の御心をして成さしめ給へ。といつたやうな祈である。これは何もキリストに限つたことではない。井伊大老は佛教徒で、劍道にも茶道にも造詣が深かつた。この人の書いた書物に茶の湯の一會集といふのがある。そこ

の中に、茶の湯の極意を、

抑、茶の湯の交會は一期一會といひて、たとへば幾度同じ主客交會するも、今日の會は再び歸らざることを思へば、實に我が一世一度の會なり。

といつて居る。

今日客を呼んで四疊半で茶をする。これが今生の最後になるかも知れぬ。のみならず、我々は同じ事を度々するが、或時或事を行ふのは實は一生にたゞ一度で、食事一つ歩行一つでもさうである。井伊大老が一期一會といつたのは、その事である。すべてこの事にこの覺悟を持つたならば、よほど立派な事が出來ようと思ふ。そこで、茶の湯が終つても、あとを崩さないで、これをよく收めるといふことが必要である。これに祈の心がある。今日の一期一會はこれで濟んだ。またこの客を復びするのに、この通りのこ



とが出来るかどうか分らぬ。然らば、もう一度爐に炭を足しても、う一度自分一人で飲んで、今日来てくれた客の心をしのぼう。前に述べた書物に、

主客とも餘情殘心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出づるに高聲に話さず、静にあと見かへり出で行けば、亭主……は爐前に獨坐して……一期一會すみて再び歸らざることを觀念し、或は獨服も致すこと、これ一會極意の習なり。この時寂寞として打語らふものとは、釜一口のみにして、外に物もなし……とある。唯自分と茶釜と相對して、その中に一世一代の仕事をやつた味を味ふ。何事につけてもこの覺悟を以て尙前に進む。「今日はこちらですんだ、もう樂だ」といふ心持とは違ふ。此の如きは一の大なる祈である。キリストの祈、佛教の報恩謝徳、皆一つである。要するに、この五尺の軀、この小さな我の中に非常に偉大なもの

野口米次郎  
愛知縣の生、  
明治八年、  
英文學者、  
應義塾大學  
教授

があることを沈思する。この感應融合の味を味へば、そこに深長の味が出て来る。すべての方面にかやうな修養を積めば、そこに始終動き揺いて已まない小さな我を忘れて、動くことなき大きな永遠な我に觸れることが出来るであらう。(光あれ)

### 二八 藝術の神祕國

野口米次郎

外人が私の宅へ来て、何か日本獨得のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。私は彼を飛石で路のついて居る謂はゆる露路に立たせる。そして、こゝは外面的世界を捨てて自己遍照に入る通路だ」と説明する。私は彼に茶席を取巻く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を経て灰色になつて居る老樹を指さしていふ、君はこゝに沈黙の祝福のあることを感じねばならない。我我東洋人は凡べての詩の最高潮を寂寞の中に發見するのだ、寂寞



の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつてもいい。また唯美の悦樂境といつてもいい。その名前はどうでもいい。……こゝは孤獨に生きる無遍の住む所だ。眞實の個人主義を發見して、さうして宇宙の靈に合する所だ。私は、その外人に、古びた花崗石の燈籠が、聖人か哲學者か詩人かでもあるかのやうに蹲つて居る姿に注意させていふ。この燈籠の心の中には、眞理を照らす謂はゆる燈臺の灯がある。この光は人がどうして社會の狂瀾怒濤を忘れるかを教へるであらう、どうして人生の廢墟と塵埃とから脱するかを教へるであらう、どうして清澄な默禱の雰圍氣を作るかを教へるであらう、どうして茶道に入るかを教へるであらう。私は、彼に、茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、我々が自然を足元から眺めて敬禮することが出来るやうになつて居ると語り、茶席の庇が低く作られてゐて、そこ

の小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるのに便であるといふ。

それから、私は彼を茶席に入らせて、氣味の悪いぐらゐ冷たい疊の上に坐らせ、さうして眼を閉ぢて默想せよと強ひる。彼は私の言ふがまゝにする。私は、彼に、どうだね、默想の神祕は君に清淨界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。我々がこゝで創造しようとする甘やかな靜かな恍惚境に對して、君は何と思ふか。といふと、彼は漠然たる微笑を洩らすだけで、一言も發することが出来ない。東洋否、日本の審美觀を十分に理解することの出来る感情の所有者でない限りは、大概の外人は私の言葉を了解することが出来ない。了解することが出来ないのも無理はない。なぜならば、この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生とを融和させて、それを



單純化させた日本人の態度は、彼等外人がこれまで夢にも見なかつた所のものであらう。併し、私に外人が日本で一番特色のあるものは何であるかと尋ねたならば、私は直ちに茶席を擧げる。否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらうと信ずる。

私はこゝで私が嘗て書物で讀んだことのある一つの物語を話したい。將軍秀次が朝の茶に三四人の茶人を招いたことがあつた。招かれた茶人は當代の名家であつたことはいふまでもない。季節は四月、日は二十日で、櫻もまだ散るか散らないといふ頃で、春の氣分も段々老いて來た時分であつた。朝の催であつたから、東風は茶席の軒端の露を拂ひ、庭の樹木には朝の光を恐れて夜の靈が蹲つて居るやうに思はれた。茶席の中には燈火が照らされず、靜寂が茶席の全部を占領して居つた。耳を敬てると、茶釜から銀

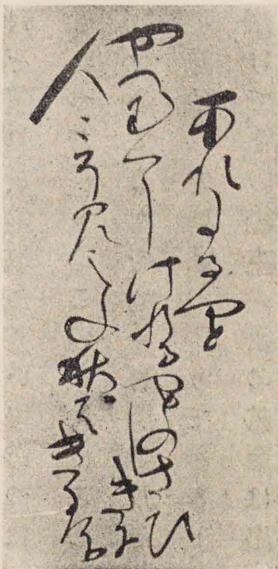
秀次  
豊臣氏、秀吉  
の養嗣子

定家  
藤原氏、鎌倉  
時代の歌人、  
新古今集・新  
勅撰集の撰  
者、仁治二年  
（一一三二）  
八十  
ほととぎす  
左大臣藤原實  
定の歌

鈴のやうな響が出て來る。それは湯のたぎる音で、このもの古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權を持つて居るやうに思はれた。招かれた客人は誰も無言で、主人役の秀次の出席を今や遅しと待つてゐた。所で、主人はなかく、出て來ず、客人どもは欠をかみしめて居ると、突如として有明の月がすつと忍び込んで來て、その微に冴えた曙近い月の影が落ちて行く所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてばつたりと止まつた。その色紙には、定家の能筆で、ほととぎす啼きつる方を眺むれば、たゞ有明の月ぞ残れる。の歌が書いてあつた。招かれた茶人どもは、はたと膝を打つて、はゝあ、この茶筵はこの色紙を見せるための催だな。有明をあてこんで、たゞ有明の月ぞ残れる。の歌の色紙とは、將軍の御趣味のほど感歎の至りである。と心の中で叫んだ。話はたゞこれだけで、その後主人役の將軍は出席したか、またどういふ風にこの



あれたる  
やむどら  
へむどら  
げれるやど  
さびしきね  
こそ見えに  
はきにけり  
秋人



藤原定家筆蹟

茶會が終つたかは分らない。しかし、そんなことはどうでもいゝ。話の要點は、秀次の唯美的な態度に繋つて居る。實に彼の態度は精細な詩の祕術に觸れたものである。この特殊な審美的雰圍氣を誘致し得た藝術的態度は驚歎に値する。洗鍊し盡された文化の酵母から生れた詩的行爲とはこのことであらう。詩歌・繪畫の藝術品を紹介する方法として、私は他の何處にこれ以上に優美なものがあらうとは思はない。また繪畫や詩歌を鑑賞する方法として、偶然にこの招かれた茶人どもが發見したこと以上に幽雅なものがあらうとは思はない。私はこの態度こそ諸外國に誇ることが出来ると信ずる。西洋は質より量に走る、また複雑の果は混亂に落ちる。

西洋は如何に自然を調節配列するかを知らない國である。西洋は如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は西洋に如何に自然と人生とを選擇し單純化するかを教へねばならない。茶席の生活を重要視した昔の文化は、沈黙と孤獨との徳を教へた。量より質を重大視して、小の中に大を發見する方法を教へた。有らゆる人生の完成は自個整理から始まらねばならないことを教へた。そして、茶席こそこれが具體化したものに外ならない。故に、私は外人を茶席に案内して、それが日本の創造した文化の一大景觀であると説くのである。

私は茶席の作法について學んだことはない。私は外人を其處へ案内するとしても、決して細かい作法を説く資格を持つてゐない。併し、私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて、人生を外面的世界から解脫して、無礙自在な永劫を擱むことが出来るやうな



利休  
千宗易、豊臣  
秀吉の茶道の  
師、天正十九  
年(三十五)  
年七十一  
歿

氣がする。言換へると、私も生死一如の境地が茶席で發見されるやうな氣がする。西洋人でも詩の理解にすぐれた人ならばこの境地に入るこゝが出来ると思ふ。茶席は日本特殊の創造であるけれども、確に世界的價值のある理由もそこにある。よしんば今日の西洋人が日本の茶席藝術を理解しないとしても、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないとは限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を説くものである。

私は更にもう一つの挿話を語りたい。話は宗匠利休と太閤秀吉に關して、前者が後者を「朝顔の茶」に招待した事實である。利休の時代には、朝顔は至つて珍しいものであつた。話によると、利休の庭には朝顔の花が澤山植ゑてあつたやうに思はねばならないが、太閤が來ると定まつた當日になつて、利休は庭の朝顔全部を切捨てさせて仕舞つた。太閤は茶より朝顔の花が見たいので利休

の招待を受けたのであつた。所が、利休の家へ來て見ると、朝顔は一つも彼の眼に觸れなかつた。で、頗る不興の體で、彼は茶席の方へ歩みを進めた。太閤は利休に向つて、「お前の自慢の朝顔は何處に植ゑてあるか」と詰問した。利休は無言であつた。太閤は更に



利休千

一層不興の顔を顰めながら茶席へ入つた。茶席へ入つて座に就いて、顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が妖嬌たる姿をそこに顯して居つた。それは宛も忘れられた日光の一片が床の間で輝いて居るといふやうな工合に見えた。太閤の喜は非常であつたに相違ないが、話はさう詳細に渡る必要はない。要は利休が花の全部を庭から捨て



光悦 本阿彌氏、刀  
 家・書家、寛  
 永十四年(三  
 十一)歿、年八  
 十一  
 宗達 津田氏、堺の  
 茶人、永祿九  
 年(三三)歿、  
 年六十三  
 光琳 尾形氏、京都  
 の畫家、享保  
 元年(三七)歿  
 芭蕉 松尾宗房、伊  
 賀國の俳人、伊  
 元祿七年(三  
 一)歿、年五十

させて、たつた一つの朝顔に一大名譽を輝かせた點にある。利休のこの處置は、前に述べた將軍秀次の處置と同程度に價值づけねばならない。實に芳ばしい藝術的態度であるといはねばならない。私は利休に對して茶人としてよりは寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふ。この態度は九十九枚の繪を焼いて一枚だけを取つて置く美術家の態度である。私は光悦や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨てて仕舞つた利休の態度は、九十九の作を捨てて、一つだけの發句を殘さうとする俳人の態度である。私は芭蕉は確にこの態度の人であつたらうと思ふ。そして、この態度こそは、日本の永い文化の生んだ最も偉大なもので、優に世界に誇ることが出来ると思ふ。床の上で一本の草花が歌ふ獨唱に何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理状態で、その歌ふラ

ラプソデー  
 形式、脚色が  
 自由で、斷片  
 的な、感  
 激的詩

ラプソデーには麗しい抽象的な神祕がある、暗示がある。その中から精神的雰囲気は夢のやうに、また幻のやうに放散されることを感じる。獨唱の生活には自個の保全がある、個人格の充實がある。我々日本人の古い文化が生んだ藝術家は、畫家でも歌人でも俳人でも、悉く獨唱的生活の信者であつた、歎美者であつた。その生活の中から永遠無終の藝術が生れたのである。私は獨唱家としての山上の一本松を歌つて、かういふ言葉を書いて居る。  
 「お前の獨唱家としての態度には、獨立の大きな威嚴がある。  
 そして、その獨立は沈黙と孤獨の聖なる空氣の中で育つたもの  
 のだ。」

お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、あゝ、お前の銀のやうな獨唱に、

何たる壯嚴な森嚴を私は感じるであらうか！



私は泣かないばかりの感激をお前の獨唱に感じた。多少たりとも個性は合唱の場合に破れる。だが、獨唱は自己表現の完全なものである。獨唱家なればこそ利休は偉人であつた、光悦は偉人であつた、芭蕉は偉人であつた。獨唱的態度から日本の茶席は生れた、繪畫は生れた、俳句は生れた。若し今日の日本にこの態度がなく、またこの態度の藝術家がないとすると、藝術國としての日本の特徴は已に亡びたものである。新古今集にある定家の歌に、「見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮」とあるが、孤獨に生きる普遍的寂寥味は、日本藝術が最高潮に達した場合である。寂寞の中に靈の無礙自在を發見して、人生の恍惚に入ることが日本人の見出した詩の神祕でなくて何であらう。今日の日本人がこの神祕を失ひつゝあるのは遺憾である。一度この神祕を失つたが最後、

二度とそれを取返すことは出来ない。日本人は變つた神祕を發見するかも知れないが、その時が来るまでは詩の上での亡國といはねばならない。私は亡國民となりたくない、私はどこまでも我が創造した詩の神祕を握つてゐたい。

二九 時

荒木寅三郎

古來偉人傑士にして、時の利用に因りて大業を成就し、時の分配に因りて百忙中に綽々たる餘裕を得たる者、枚擧に勝へず。禹は寸陰を惜しみて治水分土の偉功を奏したりき。ロングフェローは朝餐前の十五分時を積みてダンテ神曲の大翻譯を完成したりき。憤を發して食を忘れ、樂しみて以て憂を忘れし篤學の孔子は、沂に浴し舞雩に風する餘裕を有したりき。エドワード・グレイは、英國政府の外務に鞅掌し、政務蝟集の身を以て讀書釣魚の餘裕を

荒木寅三郎、群馬縣の人、慶應二年生、醫學博士、京都帝國大學總長、  
禹、支那夏朝の始祖、  
ロングフェロー、米國の詩人、(1807-1882)、  
沂、支那魯國の城南にある川、  
グレイ、英國の外交家・著述家、(1792-1895)



ファウスト  
ゲーテの名著

フンボルト  
ドイツの科  
学者・著述家  
(1769-1859)

リットン  
英國の小説  
家・詩人 (1818-1883)

野史

大日本史の續  
儒として、後  
小松天皇から

仁孝天皇まで  
の事蹟を記し  
た歴史、二百  
九十一卷

飯田黙叟、周  
名は忠彦、勤

防國の人、川

宮家の有栖川

文久元年(一八  
三〇)歿、年六  
十三

有し、殊に鮭の發生・蕃殖、鳥の名稱・聲音を詳考して、之に精通したりき。ゲーテ、ファウストに就き新想を得れば、接客中にも直ちに辭して書齋に入り、其の記述に従事するを常としたりき。アレクサンデル・フォン・フンボルトは日中寸暇なく、早晨・深夜に研究の功を積み、遂に浩瀚なる名著を成したりき。エドワード・ブルワー・リットンは、政治家・事業家・旅行家を兼ねたる多忙の人なりしが、毎日三時間を著作に充て、遂に數十卷の大著書を出したりき。野史の著者飯田黙叟は毎日主家に出仕し、毎夜父の晩酌に侍し、其の餘暇に群籍を博覽して、遂に其の大著を成し、就中大日本史は、逐次二卷を借りては返し、返しては借り、遂に全部を寫了したりき。應に見るべし、時は分配の宜しきに因りて餘裕を生ずべく、此の餘裕を積み、利用せば、以て心神を慰め、性情を養ふに足り、以て大事を興し、偉業を成すに足ることを。已に然らば、時の浪費は一種の罪惡

本學  
京都帝國大學

と謂ふべし。自己が浪費する罪既に小に非ず、他人をして浪費せしむる罪は更に大なり。自己が浪費すると同時に他人をして浪費せしむるに至りては、尤も容すべからざる大罪と謂はざるべからず。本學は正確なる時の標準を全學に示さんが爲に、新に精巧なる大時辰儀を購求し、其の到着を待ち、此の大講堂の高塔に裝置せんとす。望むらくは諸子、此の時表を仰ぐ毎に、慨然として時の分配・利用に感奮し、其の鐘聲を聞く毎に、惕然として時を浪費する罪惡の恐るべきを猛省せよ。

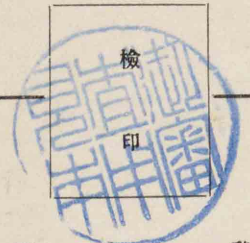
諸子。一たび失ひたる富は勤儉に由りて再蓄することを得べし。一たび失ひたる知識は學習に由りて再得することを得べし。一たび失ひたる健康は攝養と醫藥とに由りて回復することを得べし。唯一たび失ひたる時は、永久に之を失ひて、回收すべき期なし。貴きかな、時の利用。重きかな、時の分配。吾人の現在を醇化



すること之より善きは莫く、吾人の將來を多幸にすること之より大なるは莫し。學術の進修は實にこれに由る。品性の向上も亦實にこれに由る。浪費すること勿れ、一分の時。諸子の前途は其の中に存す。(學士會月報)

# 現代國語讀本 卷十終

現代國語讀本



著者 **八波則吉**  
 發行者 **株式會社 東京開成館**  
 代表者 **松本繁吉**  
 印刷者 **新井修**  
 西部販賣所 **三木佐助**  
 東京市東區北久寶寺町心齋橋通角  
 東部販賣所 **林平次郎**  
 東京市日本橋區數寄屋町七番地

大正十二年十一月廿七日印  
 大正十三年一月一日訂正再版印刷  
 大正十五年十月二十日修正三版印刷  
 昭和二年二月四日訂正  
 昭和四年四月四日訂正  
 昭和四年四月四日發行

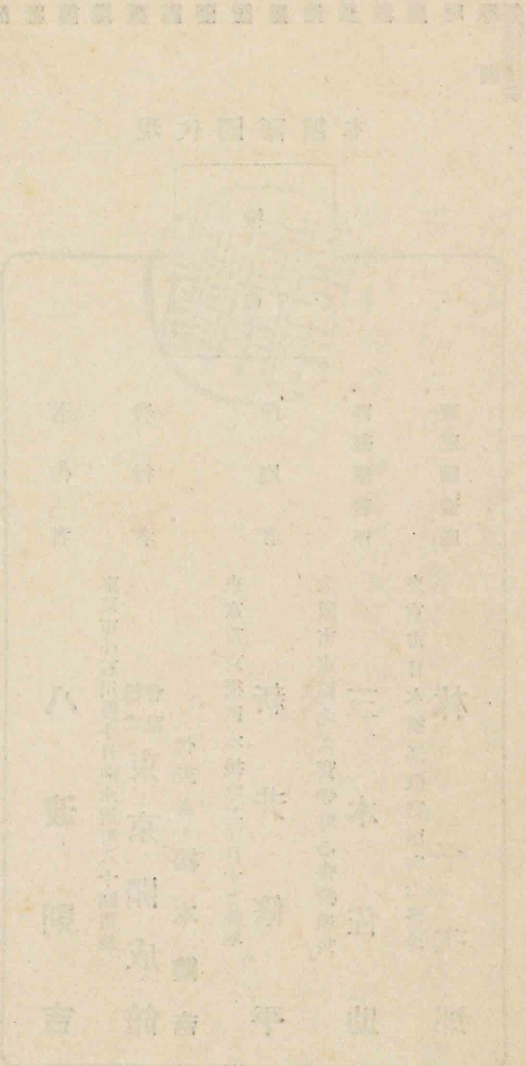
現代國語讀本  
 卷一—二金四拾七錢  
 卷三—六金四拾六錢  
 卷七—十金四拾參錢

發行所 **東京開成館**  
 東京市小石川區小日向水道町八十四番地  
 株式會社  
 昭和四年度臨時定價  
**金七拾壹錢**  
 東京東區口金貯替振  
 番二二三五第

(刷印堂新電)

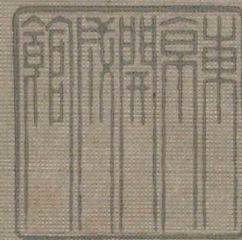


No.5  
木村信徳



東京支店  
東京支店





文庫  
27  
698

広島大学図書  
2000090698  
